資料

（平成二十年十二月）

# 第五十三回「合宿教室」（伊勢）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

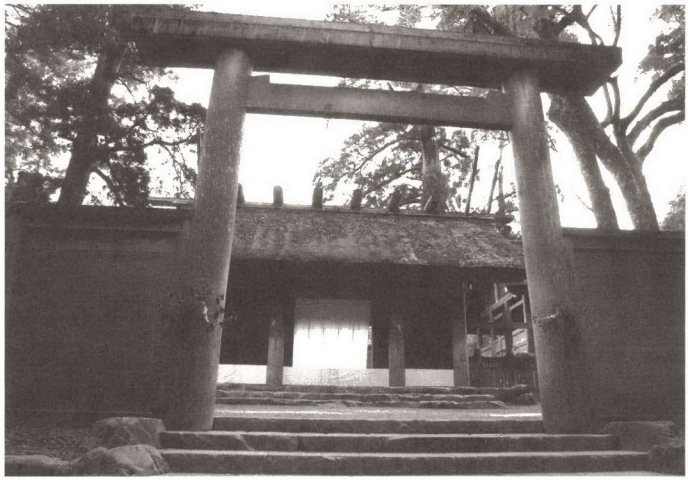
社団法人　国民文化研究会

# 第五十三回〝合宿教室（伊勢）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成二十年八月二十一日（木）から二十四日（日）まで三泊四日間

ところ　三重県伊勢市「神宮会館」

参加総数　一五〇名



目　次


〝はしがき〟に代へて　……理事長　上村和男…2

大学別参加者数・その他の人数の内訳　……5

〝合宿教室〟53年の歩み……6

〝合宿教室〟の日程表（三泊四日）……8

第53回〝合宿教室〟のあらまし　……9

走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…27

合宿中に創作された「短歌詠草」……参加者全員…83

あとがき　……99

カメラ・レポート22枚（29ページから71ページの左頁に掲載）

# 〝はしがき〟に代へて

㈳国民文化研究会理事長（東海ゴム工業㈱・顧問）
上村和男

第五十三回を迎へる「合宿教室」は本年八月二十一日～二十四日の三泊四日、〝日本人の心のふるさと〟である伊勢の「神宮会館」で開催されました。この会場は「合宿教室」の節目となった第五十回以来の二度目の利用となります。神宮の佇まひは平成二十五年の遷宮が間近に迫ってゐることを感じさせない静かで荘厳さに満ちてゐて心が洗はれ、自然の中に心が溶け込むやうな神秘性をも感じさせるものでありました。偶々、天候の具合で五十鈴川の水量が少なく川底が露出した光景を目にして驚かされましたが、合宿が終る前日には雨が降り五十鈴川本来の姿を取り戻し美しい流れになってゐました。本来の姿を取り戻すことは自然であれ、家庭であれ、国であれ、美しくすばらしいことであることを実感しました。参加者（総人数百五十名）は神路山をはじめ大自然の山々に包まれて、学問・人生・祖国の姿を心ゆくまで語り合ひました。

今回講師としてお招きした日本政策研究センター代表の伊藤哲夫先生には「国家の自立とはどういふことか」と題してご講義をいただきました。先生は我が国の直面する内外の政治・経済・外交の課題について概略を述べられ、国家としての「自立」が外から脅かされてゐることのみならず、自ら亡国を招きかねない危機的状況であることを指摘されました。その一つが憲法問題で、国会やマスコミの論議からは我々の守るべきものが何なのか見えてこないとして、明治憲法の成立に最も尽力した井上毅の役割に言及されました。概念的にヨーロッパの憲法を模倣するのでなく、日本人の生活の原点をなしてゐる国学や儒学を勉強し、皇室を中心として生きてきた「君民一体」の思想を中核に据ゑて「知らす」といふ我が國の国柄を表現し得る語をもって、近代国家日本に相応しい明治憲法が草案されたことを文献を示しつつ詳説され、参加者に深い感銘を与へました。

続いて神宮司庁神宮参事の渡邊和洋先生の「式年遷宮について」のご講話の中で、神宮は「数ある祭祀の中で、ことに十月の

神嘗祭を完全に執り行ふために存在してゐると云っても過言ではない。その年に穫れた新穀を大御神に奉り、五穀豊穣と皇室を初め国家・公民の安寧を感謝・祈願するお祭りで、大御神に最上級の御饌を奉ることに本旨がある。このやうなシンプルな祭礼が二千年に亘って繰り返し執り行はれてきたことはまさに驚くべきことである」と述べられ、「二十年に一度行れる式年遷宮は大神嘗祭と云はれてゐるやうに神嘗祭の規模を最大限に拡大したもので、神嘗祭の理解があって初めて御遷宮の意義も見えてくる」と説かれました。

参加者は「合宿導入講義」をはじめ、「古事記」や「聖徳太子」に関する古典講義などを聴いた後、班別研修に於いて資料を読み直し感想を述べ合ふ中で班員に自分の思ひを的確に伝へることが如何に難しいことか、また短歌創作とその相互批評を行ふ中で短歌を作る楽しさや苦しみなど貴重な体験を得ることができました。

学園紛争やイデオロギー対立のあった頃の学生は右翼的であれ左翼的であれ良かれ悪しかれ主体性があり若者らしい活力がありました。然しこの十年、学生が人生の目標を喪失し、公に盡すといふ気概が薄れ、自己に閉ぢ籠ってしまふ傾向が見えます。これは何に起因するかと云へば、戦後占領政策により祖国を侵略国家と規定してゐる日教組教育によるところが大きいと思はれます。さうした日教組教育からは正しい郷土愛も祖国愛も芽生えて来ないし、祖国を護り、祖国の爲に我が身を盡すといふやうな思考は生まれてきません。

しかし、この「合宿教室」参加者の多くの方々は起居を共にして学んでゆく中で、日を追ふごとに祖国が、そして自分の盡すべき道が少しづつ見えてきたのではないかと思ひます。「学ぶとは一体どういふことなのか」、「知識の伝達が主となってゐる現代日本の大学教育はこれで良いのか」さらには「人と接するにはどういふ心掛けで相対すべきか」等々、様々な思ひを持たれたことでせう。そしてそれらの答へを心の底に感得してもらへれば、今後の学生生活や社会生活の中で、今の世の中の何処に欠陥が宿ってゐるかに必ず気付くことができると思ひます。

この「感想文集」によって、三泊四日の短い期間ではありましたが、班友の思ひが分かります。真剣に一つのことを考へ語り

合ふ中で友情が生まれ、共に祖国を思ふ同胞感を覚えた方々もいらしたでせう。他方、戸惑ひを感じた方々もゐらしたでせう。いづれにしても現在の学園や社会では味はふことのできない実感が表明されてゐます。是非とも御一読たまはりたいと存じます。

なほ、紙面の都合上、感想文の全文を載せられなかったことは何卒ご容赦いただきたいと存じます。またこの文集作成のために休日を割いて取組んでくれました会員の皆さん（あとがきに記載）、そして合宿運営委員長の折田豊生さん並びに運営委員の方々、指揮班長の古川広治さんと指揮班の方々のご労苦に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、この「合宿教室」の事業を開催するにあたり、本年もまた、各界からお寄せ戴いた得難いご支援に対しまして心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成二十一年）の第五十四回「合宿教室」は八月二十日（木）～二十三日（日）までの三泊四日間「厚木市立　七沢自然ふれあいセンター」（神奈川県厚木市）で開催されます。

招聘講師として埼玉大学教授　長谷川三千子先生・桐蔭横浜大学教授　ペマ・ギャルポ先生（チベット文化研究所長）のお二方にご出講いただく予定です。

何卒、皆様ご参加くださるやうお願ひいたします。

第53回全国学生青年合宿教室（平成20年８／21～８／24）於「伊勢神宮」

参加者

（学生班）（洋数字は参加学生数）

東京大学４　青山学院大学１　亜細亜大学１

杏林大学３　国学院大学２　中央大学１

首都大学東京１　明星大学２　玉川大学１

桐蔭横浜大１　日本大学１　早稲田大学１

日本工学院専門学校１　京都大学１　立命館大学１

大阪工業大学１　九州工業大学２　九州大学１

福岡教育大学１　九州女子大学１　九州産業大学２　高校生１

計　三十一名（うち女子六名）

（社会人参加者）　五十名（うち女子十五名）

（招聘講師）　二名

（国民文化研究会）　五十九名

（事務局・アルバイト）　五名

（見学者・慰霊祭協力）　三名

総計　一五〇名

## ―“合宿教室” 53年の歩み―

| 回数 | 年　度 | 開催地 | 参加人員 | 主　　要　　講　　師 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 昭和31年 | 霧　島 | 92 | 広田洋二・日下藤吾・川井修治 |
| 2 | 〃 32年 | 福　岡 | 127 | 竹山道雄・高山岩男・浅野晃 |
| 3 | 〃 33年 | 佐　賀 | 72 | 勝部真長・木下彪・森三十郎 |
| 4 | 〃 34年 | 阿　蘇 | 160 | 花田大五郎・中山優・野口恒雄 |
| 5 | 〃 35年 | 雲　仙 | 200 | 木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎 |
| 6 | 〃 36年 | 雲　仙 | 203 | 小林秀雄・木内信胤・津下正章 |
| 7 | 〃 37年 | 阿　蘇 | 215 | 福田恆存・木内信胤・黒岩一郎 |
| 8 | 〃 38年 | 雲　仙 | 202 | 竹山道雄・木内信胤・木下広居 |
| 9 | 〃 39年 | 桜　島 | 202 | 小林秀雄・広田洋二・木内信胤 |
| 10 | 〃 40年 | 大　分 | 215 | 岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄 |
| 11 | 〃 41年 | 雲　仙 | 240 | 福田恆存・木内信胤・戸川尚 |
| 12 | 〃 42年 | 阿　蘇 | 336 | 林房雄・太田耕造・木内信胤 |
| 13 | 〃 43年 | 霧　島 | 353 | 竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤 |
| 14 | 〃 44年 | 阿　蘇 | 403 | 岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳 |
| 15 | 〃 45年 | 雲　仙 | 491 | 小林秀雄・木内信胤・桑原暁一 |
| 16 | 〃 46年 | 霧　島 | 302 | 村松剛・木内信胤・戸田義雄 |
| 17 | 〃 47年 | 阿　蘇 | 402 | 木内信胤・山本勝市・胡蘭成 |
| 18 | 〃 48年 | 雲　仙 | 433 | 村松剛・木内信胤・山口宗之 |
| 19 | 〃 49年 | 霧　島 | 528 | 小林秀雄・木内信胤・戸田義雄 |
| 20 | 〃 50年 | 阿　蘇 | 435 | 福田恆存・木内信胤・夜久正雄 |
| 21 | 〃 51年 | 佐世保 | 372 | 長谷川才次・村松剛・木内信胤 |
| 22 | 〃 52年 | 雲　仙 | 332 | 木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一 |
| 23 | 〃 53年 | 阿　蘇 | 440 | 小林秀雄・木内信胤・松本唯一 |
| 24 | 〃 54年 | 霧　島 | 268 | 木内信胤・高山岩男・山田輝彦 |
| 25 | 〃 55年 | 雲　仙 | 431 | 福田恆存・法眼晋作・宝辺正久 |
| 26 | 〃 56年 | 阿　蘇 | 353 | 齋藤忠・村松剛・青砥宏一 |
| 27 | 〃 57年 | 霧　島 | 321 | 齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩 |
| 28 | 〃 58年 | 雲　仙 | 327 | 齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平 |
| 29 | 〃 59年 | 阿　蘇 | 302 | 吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五 |
| 30 | 〃 60年 | 阿　蘇 | 249 | 市原豊太・高村坂彦・小田村四郎 |
| 31 | 〃 61年 | 島　原 | 294 | 江藤淳・村松剛・小柳陽太郎 |
| 32 | 〃 62年 | 阿　蘇 | 269 | 小堀桂一郎・鈴木一・關正臣 |
| 33 | 〃 63年 | 島　原 | 227 | 児島襄・小堀桂一郎・加納祐五 |
| 34 | 平成元年 | 島　原 | 204 | 村松剛・山田輝彦・国武忠彦 |
| 35 | 〃 2年 | 阿　蘇 | 204 | 黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志 |
| 36 | 〃 3年 | 厚　木 | 244 | 田久保忠衛・国武忠彦・山内健生 |
| 37 | 〃 4年 | 阿　蘇 | 257 | 村松剛・平川祐弘・奥冨修一 |
| 38 | 〃 5年 | 厚　木 | 271 | 村松剛・佐伯彰一・白濱裕 |
| 39 | 〃 6年 | 阿　蘇 | 253 | 徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一 |
| 40 | 〃 7年 | 厚　木 | 240 | 小川三夫・長谷川三千子・東中野修道 |

| 回数 | 年　度 | 開催地 | 参加人員 | 主　　要　　講　　師 |
|---|---|---|---|---|
| 41 | 〃 8年 | 阿　蘇 | 171 | 竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊 |
| 42 | 〃 9年 | 厚　木 | 213 | 西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎 |
| 43 | 〃 10年 | 阿　蘇 | 193 | 小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎 |
| 44 | 〃 11年 | 富　士 | 178 | 井尻千男・長谷川三千子・山口秀範 |
| 45 | 〃 12年 | 阿　蘇 | 154 | 小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義 |
| 46 | 〃 13年 | 富　士 | 150 | 伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣 |
| 47 | 〃 14年 | 江田島 | 244 | 中西輝政・山内健生・青山直幸 |
| 48 | 〃 15年 | 富　士 | 171 | 小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志 |
| 49 | 〃 16年 | 阿　蘇 | 169 | 中西輝政・小田村四郎 |
| 50 | 〃 17年 | 伊　勢 | 219 | 長谷川三千子・松浦光修 |
| 51 | 〃 18年 | 霧　島 | 191 | 井尻千男・吉田好克・占部賢志 |
| 52 | 〃 19年 | 奈　良 | 175 | 小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣 |
| 53 | 〃 20年 | 伊　勢 | 150 | 伊藤哲夫・占部賢志 |
| 累計・参加人員 | | | 13,848名 | |

㈳国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

# 第53回（平成20年）全国学生青年“合宿教室”日程表

| 8月21日（木） | 8月22日（金） | 8月23日（土） | 8月24日（日） |
|---|---|---|---|
| （注意）<br>↓<br>参加者は、一班七名前後の班に所属します。<br>会場入口付近で、所属する班を確認のこと。<br>随時受付<br>開会式：14時開始 | 起床・洗面<br>(06:30)<br>朝の集ひ<br>(07:15)<br>（写真撮影）<br>朝　食<br>(08:00)<br>**講　義**<br>「国家の『自立』とはどういうことか」<br>日本政策研究センター代表<br>伊藤哲夫　先生<br>(09:30)<br>質疑応答<br>(10:00)<br>班別研修<br>(12:00)<br>昼　食<br>(12:45)<br>**講　話**<br>「式年遷宮について」<br>神宮司廳　渡邊和洋　先生<br>(13:30)<br>**短歌創作導入講義**<br>㈱HIエアロスペース<br>内海勝彦　先生<br>(14:30)<br>**野外研修・短歌創作**<br>●伊勢神宮内宮参拝<br>●神　楽　奉　納<br>●短　歌　創　作<br>（短歌提出）<br>(17:00)<br>夕　食<br>入　浴<br>休　憩<br>(19:00)<br>**古典輪読導入講義**<br>「『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読にあたつて」<br>元富山県立富山工業高等学校教諭<br>岸本　弘　先生<br>(20:30)<br>班別輪読<br>(22:30)<br>就　寝<br>(23:00)<br>消　灯 | 起床・洗面<br>(06:30)<br>朝の集ひ<br>(07:00)<br>朝　食<br>(08:00)<br>**講　義**<br>「明治維新の光と影<br>－吉田松陰と山尾庸三－」<br>福岡県立太宰府高等学校教諭<br>占部賢志　先生<br>(09:30)<br>班別研修<br>(12:00)<br>昼　食<br>(13:00)<br>**創作短歌全体批評**<br>興銀リース㈱<br>小柳志乃夫　先生<br>(14:00)<br>**班別短歌相互批評**<br>（短歌再提出）<br>(17:00)<br>夕　食<br>入　浴<br>休　憩<br>(19:00)<br>**会員発表**<br>㈱寺子屋モデル　黒岩礼子　氏<br>藤村酒造㈱　藤村孝信　氏<br>(20:00)<br>**慰霊祭の説明**<br>元新潟工科大学教授　大岡　弘　先生<br>(20:30)<br>**慰霊祭**<br>(21:30)<br>班別懇談<br>(22:30)<br>就　寝<br>(23:00)<br>消　灯 | 起床・洗面<br>(06:30)<br>朝の集ひ<br>(07:00)<br>朝　食<br>(08:00)<br>**合宿を顧みて**<br>国民文化研究会副理事長　澤部壽孫氏<br>**運営委員長挨拶**<br>合宿運営委員長　折田豊生　氏<br>(09:00)<br>全体感想自由発表<br>(10:30)<br>地区別懇談<br>(11:00)<br>感想文執筆<br>第2回短歌創作<br>班別懇談<br>(12:30)<br>昼　食<br>(13:30)<br>**閉会式**<br>（挨拶）（社）国民文化研究会　副理事長<br>今林賢郁　氏<br>(14:00)<br>閉会式：14時終了<br>（閉会式終了後、解散） |
| **開会式**<br>（挨拶）国民文化研究会　理事長<br>上村和男　氏<br>**オリエンテーション**<br>**（合宿趣旨説明及び諸注意伝達）**<br>合宿教室運営委員長　折田豊生氏<br>合宿教室指揮班長　古川広治氏<br>(14:45)<br>小休憩（15分）<br>(15:00)<br>**合宿導入講義**<br>「誰の心にもある<br>『内なる国家』を見つめよう」<br>損害保険料率算出機構<br>福岡調査事務所<br>鎹　信弘　先生<br>(16:30)<br>班別研修<br>(17:30)<br>夕　食<br>入　浴<br>休　憩<br>(19:30)<br>**歴史講義**<br>「よみがへる古事記」<br>国立病院機構・都城病院長<br>小柳左門　先生<br>(21:00)<br>班別研修<br>(22:30)<br>就　寝<br>(23:00)<br>消　灯 | | | |

# 第五十三回〝合宿教室〟のあらまし

## 第一日目

（八月二十一日・木曜日）

第五十三回全国学生青年合宿教室は、「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ばう」との呼び掛けのもと、三重県伊勢市「神宮会館」にて開催された。ここでの合宿教室開催は一昨年に続いて二度目である。「神宮会館」は、神路山のふもと五十鈴川に架る宇治橋の近くに位置し、内宮正宮への参拝を日程に組み三泊四日の合宿教室は始まった。北は北海道から、南は鹿児島に至る全国各地から集まった参加者は、長旅の疲れもものともせず、受付をすませるとただちに開会式に臨んだ。

### 開会式

東北大学大学院修士二年宮地順造君の開会宣言の後、主催者を代表して上村和男理事長は「戦後のわが国では国家あるいは公に対するものの見方やわが先人たちの素晴らしさといふものが教へられず、国家意識も感じられなくなってゐる。この合宿では、二千年の歴史を持つ我々日本民族の歩んで来た道を顧み、祖先がこれまで伝へて来た言葉や文化をもう一度見つめ直して、日本人とは何かを深く考へる切っ掛けにして欲しい」と挨拶した。続いて参加学生を代表して九州工業大学四年の鷲頭祥平君は「昨年初めて参加して大学では学べない講義をお聴きし短歌創作で自分の心を素直に詠む体験をした。他大学の学生との交流も勉強

になった。今回も率直に意見をぶっつけ合ひ、考へを聞くようにしたい。一緒に楽しく学びませう」と呼び掛けた。

開会式の後、オリエンテーションが行はれ、折田豊生合宿運営委員長より合宿趣旨説明が、また古川広治指揮班長より諸注意伝達が行はれた。

## 合宿導入講義　「誰の心にもある『内なる国家』を見つめよう」

損害保険料算出機構福岡事務所主査　鎹　信弘　先生

先生は、大学時代に山田輝彦先生（元福岡教育大学教授）の講演で、「内なる国家」（客観化して認識できる機構・権力機構としての「外なる国家」に対して、一つのいのちであり価値であり味はひ感じるほかに摑む方法がないもの）のお話を聴き「とても考へさせられた」と話され、樋口一葉の『塵中日記』に触れながら、日清戦争間近な緊迫した情勢の中で私利私欲に動く議会のあり様を見て、当時無名の二十一歳の女性が国の行く末を深く案じてゐた様子を紹介された。翻って現在の内外の情勢を説明され、軍事力を拡大し着々と国家戦略を実行に移してゐる中国の脅威に対して、日本では逆で国防の基盤が脆弱化し、青少年の国防意識も低いことに言及された。そして大東亜戦争中、勇敢にも特殊潜航艇でシドニー湾に潜入して敵艦と戦ひ自決した松尾敬宇大尉に対して、敵国オーストラリアが「かくの如き勇敢な行為は一国家の独占物ではない」として海軍葬を以って弔ったこと、大尉の母が二十六年後の昭和四十三年に答礼のため訪豪したことなどを紹介された。

最後に「わが国には大変素晴らしい一つのいのち一つの価値といふものがあるのではないでせうか。それをこの合宿で皆さんに是非感じ取って貰ひたい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人〳〵がどのやうに受け止めたかについて話し合ひがすす

められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。お互ひ初対面のせゐか、初めのうちは緊張して意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時に反論し時に共感し合ひながら、班員相互の交流が深められていった。

## 歴史講義　「よみがへる古事記」

国立病院機構　都城病院・院長　小柳左門先生

先生は、まづ初めに、三十五年かけて古代の言葉を蘇らせようとした本居宣長が若き頃、憧れの師・賀茂真淵と邂逅した場面を佐佐木信綱の「松阪の一夜」の一文に辿られ、「この生涯一度の出会ひによって古事記といふ大山脈の解読のきっかけが生れたのです」と述べられ、ほの暗い行燈の下に師と対座する宣長の感激を偲ばれた。続いて上つ巻の冒頭の「天地初発之時」を宣長はアメツチノハジメノトキと読んだが、その苦心を偲ばれ、「終に躰で受け止めたのです」と語られた。次いで中つ巻の「倭建命の御東征」の記事に触れ、西国をやうやく平らげて帰ったものの御父景行天皇から重ねて東国へ征けと命じられ、「吾既に死ねと思ほしめすなりけり」と患ひ泣かれる倭建命を「これこそ人の真心である」と受け止めた宣長の釈を紹介された。続いて走水海で行く手を妨げられた倭建命をお助けせんと入水する弟橘比売命のお気持ちを偲んで「さねさし相模の小野に……」の絶唱を朗々と読まれた。そして倭建命の御最期を国思の歌に辿られ、夜久正雄先生著『古事記のいのち』の一節を読み上げ「古事記こそ日本の大和言葉のしをりであり、そこには日本人のまごころがすべて通ってゐるのです」と結ばれた。

**第二日目**　（八月二十二日・金曜日）

早朝六時半、合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。内宮への入口である宇治橋の近くの広場に参加者一同が整列すると、国旗掲揚、国歌斉唱、ラヂオ体操が行はれ、一日の研修を新たに迎へた。

なほ、朝の集ひの後、森田仁士会員の指導で参加者一同で唱歌指導と小野吉宣会員と学生班長の谷口耕平君により御製拝誦が行はれた。合宿中歌った唱歌名と拝誦した御製は左記の通りである。

八月二十二日　旅愁・故郷の廃家

八月二十三日　明治天皇御製「あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのがこころともがな」
（今の）皇后陛下御歌「ふり仰ぐかの大空のあさみどりかかる心と思し召しけむ」

八月二十四日　明治天皇御製「あやまちをいさめかはしてしたしむがまことの友の心なるらむ」

## 講　義　「国家の『自立』とはどういふことか」

日本政策研究センター代表　伊藤哲夫先生

先生は、まづ我が国の直面する政治・経済・外交の課題につき概略を述べられ、国家としての「自立」が外から脅かされてゐるのみならず、自ら亡国を招きかねない危機的状況にあるとお述べになった。その一つは憲法問題で、国会やマスコミの論議からは我々の守るべきものが何なのかが一向に見えて来ないと指摘され、「大日本帝国憲法」の成立過程に話を遡られた。

特に井上毅が果した役割に言及され、彼の勉強ぶりを紹介された。即ち幼少より儒学の素養豊かであったが明治維新後は洋学を修めドイツ・イギリスの憲法思想を研究した。しかし実際の憲法草案作成に当っては、伝統的学問（国学）の文献を渉猟し、遂に「知らす」こそが天皇を戴くわが国の国柄を表現し得る語であるとの確信を持つに至った経緯を文献を示しつつ詳述された。近代国家日本に相応しい憲法理念と条文は、井上や伊藤博文を中心に制定

されたが、それはまた幾多の先人の国を思ふ誠が結集した賜物と深く受け止められた明治天皇は、憲法発布の日に伊勢の神宮・神武天皇陵・孝明天皇陵を初め、岩倉・木戸・大久保ら元勲の墓、さらに西郷隆盛や吉田松陰らの遺族のもとにまで勅使を差遣されたといふ歴史に埋もれた事実もご紹介下さった。「ここまでの思ひの結晶として成立した『大日本帝国憲法』を形の上では引き継いでゐるのが現憲法であって、その改正に当り、いとも簡単に思ひつきのやうな私案を云々する態度は断じて許されない」と強い調子で述べられた。

さらに学生の質問に答へて「思想の戦ひは一人から始まるもので、志を持った君こそが〝平成の井上毅にならう〟と覚悟を定めることです」と青年たちの奮起を促された。

## 講話　「式年遷宮について」

神宮司庁神宮参事　渡邊和洋　先生

先生はまづ、神宮への共通の思ひは「歴史的には各地を経巡った御師（おし）達によって肥料や水が与へられ御陰参りとなって花が咲いたと言へるが、とくに戦後は肥料も水も与へられず共通認識はどうかなと考へさせられることがある」と述べられ、神宮は「数ある祭祀の中でことに十月の神嘗祭を完全に執り行ふために存在してゐると言っても過言ではない。それはその年に穫れた新穀を大御神に奉り、五穀豊穣と皇室を初め国家・国民の安寧を感謝・祈願するお祭りで、大御神に最上級の御饌（みけ）を奉ることに本旨がある。このやうなシンプルな祭祀が二千年に亘って繰り返し執り行はれてきたことはまさに驚くべきことである」と説かれた。

次に御遷宮について「二十年に一度行はれる式年遷宮は大神嘗祭と言はれてゐるやうに神嘗祭の規模を最大限に拡大して完全な形での祭儀を目指したもので、即ち宮地（みやぢどころ）を改め、御社殿や御神宝を新しくして大御神に新殿にお遷り戴き、御饌・御酒（みき）を奉り、

大御神の御神徳がいよいよ輝くことを祈るお祭りである。神嘗祭の理解があって初めて御遷宮の意義も見えてくる」と述べられた。

## 短歌創作導入講義

㈱IHIエアロスペース　内海勝彦　先生

短歌創作を兼ねた内宮参拝の野外研修を前にして、先生は、まず大学一年の時参加したこの合宿で「昭和天皇の終戦時の御製を拝読したことが短歌との本格的な出会ひだった」と振り返られた。続いて『短歌のすすめ』の一節を紹介しながら、「短歌を詠むには技術よりも心構へや真心が大切だ」と説かれた。短歌創作の意義として①自らの体験を味はふことになる②人と人との心の交流が図られる③古人の歌が身近になり歴史に繋がる喜びを実感できるとの三点を語られた。また短歌創作の心構へとして、「自らの感動を心に甦らせ、それを的確な言葉で表現することが大切であり、それを繰返すことで歌が上達して行く」と仰った。そして昨年の合宿参加者の歌を例示して創作の作法を具体的に説かれ、正岡子規らの歌、明治天皇の御歌、亡き友山根清兄の遺詠を全員で味はった。

## 野外研修・内宮参拝・短歌創作

太古さながらの社殿が森の中にひっそりと佇む神宮は古代から一貫して流れる「国のいのち」を現代に伝へる「日本の聖地」である。青空の下、合宿会場からほど近い皇大神宮（内宮）に一同は向った。宇治橋を渡りまづ神楽殿でお神楽を奉納、その後班ごとに内宮を参拝した。この時間帯は短歌創作をかねた野外研修の時間でもあった。

# 『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読にあたって

元富山県立富山工業高等学校教諭　岸本　弘　先生

先生は初めに、この黒上正一郎先生の御著書が、国民文化研究会に連なる歩みの中で、いかに大事にされてきたかを師友の短歌に仰がれ、本文に入って行かれた。「衆生之類是菩薩佛土」といふ維摩経の一節を解釈された聖徳太子の「夫れ國土を論ずれば淨穢の殊ありと雖も、此は是皆衆生の善悪に由りて感を爲す。故に衆生に於いて必ず定んで己が國と稱するの義あり」との太子御自身の御言葉から、「仏の教へを仰ぐ衆生はそれぞれ国の歴史をもってをり、日本民族としての体験は仏の教へを学んでいく上での基盤となるものであり、太子が仏教に取り組まれたのは、この日本を何とかいい国にしたいと願はれたからであった」、この太子の強いお気持は、天照大御神の御威徳にお応へすべく国土を平定して初代の天皇として即位された神武天皇の大御心から、明治天皇の大御心に一貫して繋がってゐる御精神であると、黒上先生の文章をもとに説かれた。また、国民によって国家の状態は様々であるが、それでもそこが祖国であり、我々は祖先が作って来た歴史の集積を守って行かなければならないと述べられた。

さらに『皇后宮美智子さま　祈りの御歌』（竹本忠雄著）を紹介され、皇太子妃時代（昭和五十一年）の

いたみつつなほ優しくも人ら住むゆうな咲く島の坂のぼりゆく

の御歌について、ハンセン病で苦しみつつも、優しい気持ちをわすれずに生きてゐる人達のもとに足を運ばれる両陛下の御心に「衆生之類是菩薩佛土」といふ衆生教化に身をささげる菩薩の御精神が現実に仰がれると偲ばれた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。岸本先生のご講義を振り返りながら、紹介された文章を皆で声に出して読み味はっていった。文章のリズムに作者の思ひを偲ぶ貴重なひとときであった。

第三日目　（八月二十三日・土曜日）

講　義　「明治維新の光と影――吉田松陰と山尾庸三――」

福岡県立太宰府高等学校教諭　占部賢志先生

先生は、「これまで語られることの少かった家族の風景の中にある松陰像を弟敏三郎への愛情を通して話したい」と前置きされ、「海外渡航を企てて夜間米艦ミシシッピー号に乗り込まうとした時、松陰は手真似で希望を伝へようとしたが当直の米兵はそれをかなり正確に理解した。耳の不自由な弟との意思疎通の体験がもとになってゐるのではないか」と述べられた。次に平戸遊学中、幼少時言語障害だったが五歳のとき突如として当り前にものが言へるようになったといふ王陽明の伝記を読んで、弟もこのやうであって欲しいと「西遊日記」に記してゐる。旅先にあっても弟のことを常に気に掛けてをり、敏三郎が兄弟姉妹と揃って詩を朗誦した夢を見たと記してゐること、旅の予定を変更してまで霊験あらたかと評判高き熊本の加藤清正公廟所へ詣でたこと、江戸送りとなり家族との永訣の際、最後の最後に弟敏三郎の手をとり言葉をかけたこと等々、松陰のあふれる思ひを紹介された。

そして下田踏海を挙行したのも、「海外で既に聾唖者のための施設が開設されてゐるとの情報を摑んでゐた松陰が、弟の障害

を何とかしたいといふ思ひが動機の一つなってゐたのではないか」とも指摘された。「松陰の遺志を継いだ山尾庸三によって、後年京都に日本で最初の聾唖学校が創設された」と述べられ、「人は個人の世界と公の世界の中で生きてゐるけれども、私の世界に心を尽した人こそ国のために尽し、公の世界で偉業を成し遂げることができる」と講義を結ばれた。

## 創作短歌全体批評

興銀リース㈱　小柳志乃夫先生

まづ「歌稿を拝見し、皆さんの短歌創作への真面目な取組みが伝はってきて、大変有難く思ひました」と述べ、この後に予定されてゐる班別相互批評の注意点として「作者に心を寄せていくことを大事にし、推し量りきれないところは目の前の作者に尋ね、文字通り心の交流を体験して下さい。心の動きと言葉が一致したときは、非常に嬉しい思ひになるはずです」と語られ、各班ごとに数首の歌を取り上げて作者の心を推し量りながら、より正確な表現となるやうに正して行かれた。中でも女子学生の母への感謝の歌では「松尾敬宇大尉の母の話で思ひ出されたのでせうか。大変感動しました」と述べられ、又蝉の鳴き声の静かさをさびしいと詠んだ歌には「感性の豊かさに驚きました」と評されて、歌に詠まれた感動の深さに注意を促された。

最後に歌がうまくなる秘訣として、例えば『名歌でたどる日本の心』（国文研五十周年記念出版、草思社）に収めたやうな歌を読んで、心に残った歌を一首でも口ずさむうちに、徐々に自分の血肉となるのですと、講義を結ばれた。

## 班別短歌相互批評

全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。歌をつくったのは初めてといふ参加者が多かったが、己の心の動きを言葉にすることの難しさ、人の言はんとしてゐる事を正確に受け止めることの難しさを実感させられた。妥協を許さず、時間を超過してしまふ班も多くあったが、相手の心に迫るために心を砕くといふ、貴重な体験をすることが出来た。

## 会員発表

初めに登壇した黒岩礼子氏（㈱寺子屋モデル講師）は、不登校の児童生徒の自立をサポートする「うりはみクラブ」の担任としての毎日を活き活きと語った。「うりはみ」の名前が山上憶良の歌に由来することを紹介しながら、憶良の子供への真直ぐな愛情に倣って子供達を見守って行きたいとの思ひを述べた。不登校になる子には素直に自分を認められない所があるやうに感じられるので、良い所はその時々に言葉にして誉めてやるとのことで、その折に詠んだ歌を紹介した。

「それ、いいね」と声をかくれば笑みこぼしやさしくよく顔見する子らはも

よきところ見つくるたびに褒めてやり子らの笑顔をいや増し行かむ

偉人伝や日本の伝統文化、美しい日本語に触れる事で子供達の中に自信や誇りが生れて来ることが感じられる。今後彼らが学校でもやって行かれるやうに沢山のことを伝へ教へて行きたいと抱負を語った。

次に壇上に立った藤村孝信氏（藤村酒造㈱取締役）は、まづ学生時代四回参加したこの合宿では「日本人としてどう生きていくべきかを突きつけられた」記憶があると語った。卒業後は家業の「造り酒屋」に入ったが、杜氏といふ酒造りの職人集団の跡取りが減って杜氏製法を廃止しなければならなかった厳しい経営状況に見舞はれたこと、さうした中で百五十年近く続いた酒造りといふ家業を自分の代で断つわけにはいかないと思ひ定めたこと、数十年の経験を積まないと酒は造れないと信じら

れていゐた時代に一から酒造りに取り組んだことなどを語った。全神経を使ひ、体の節々が痛くなる程だったが、それだけに出来上った時には感極まり、改めて続けて行かければならないと固く心に誓ったと言ふ。その後県の品評会で四年連続の優等賞を受賞し、「素人」でもやってやれないことはないといふことを確信したと力強く語った。

## 慰霊祭

開会式で「戦時、平時を問はず祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先のみ霊」に一分間の黙祷が捧げられたが、合宿最後の夜を迎へて、慰霊祭が講義室の壇上に祭壇を設へて厳かに営まれた。祭儀に先立って大岡弘理事（元新潟工科大学教授）から慰霊祭の趣旨と手順が懇切に説明された。祭儀では岸野克巳会員（調神社権禰宜）のお祓ひがあり、祓詞に代へて三井甲之詠の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌が山口秀範常務理事（（株）寺子屋モデル代表世話役社長）によって朗詠された。次いで奥富修一理事（東急建設（株）常務執行役員）が御製を拝誦、山内健生常務理事（拓殖大学日本文化研究所客員教授）が祭詞を奏上した。この後、会員で「海ゆかば」を奉唱した。一同の声が講義室に響き渡った。

左は奏上された「祭詞」と拝誦された「御製」である。

### 祭詞

遙か古へより皇大神の鎮まりますここ伊勢の地にて開かれし　第五十三回全国学生青年合宿教室に集へる国民文化研究会理事長上村和男を初めとする我ら百五十名は　み国のあり方を尋ね　「日本と日本文化」の本質を明らめるべく　互ひに研鑽を重ね来たりて　合宿教室最後の夜を迎へぬ

いまし講義の終りて静まれる講義室を祓ひ浄め　齋庭を設へまつりて　遠き御代より世々代々にみ国を護り伝へましませるみ祖たちのみ霊　遠きみ祖のみこころを仰ぎつつ干戈交へるも厭はずして国の守りにみ命をささげまししみ祖たちのみ霊　平時戦時の別なく国ために尽しましませる累代のあまたのみ祖たちのみ霊を招ぎまつりまして　山の幸　海の幸　御酒御食　種々のためつ物をささげまつりて　み祭り仕へまつらんとす

昭和二十年八月十五日　畏くも玉音放送によりてポツダム宣言受諾の非常なる事態を承りしは　この上なく悲しきことなれども　その後に続く六年八ヶ月に及びしアメリカ占領軍による統治は　我が国に対する「一方的なる文化の攻撃」に他ならずして　物理的無力化のみならず精神的武装解除によりて「日本の弱体化」を狙ひしものなれば　主権回復五十六年を経ぬれども　その後遺症は国内のあちこちに残りて　国の自立を妨げつつあるは　さらに悲しきことになりき　国家主権なき被占領期に「日本の歴史は誤りなり」として　強権的に形作られし歴史否定の「戦後体制」は　今日なほ与野党の挙りて奉ずるところにして　年毎に自由闊達なる精神的活力の消え行くかに見ゆるは　いやさらに悲しきことなりき

「平和国家」「平和主義」「平和憲法」などと「平和」の美名を弄びて　自立の精神的構へ無き戦後体制にありては　和・戦両様の万古不易の心組みにて義を貫かんとせし先人の苦闘は顧みらるることなく　ために内治外交は「平和」なる言葉を前にして思考の停止しぬれば　国土を蹂躙され同胞を拉致されしも憤りの声の高まらず　つひには戦歿同胞の慰霊追悼「総理の靖国神社参拝」さへままならざる異常事態を招くこととはなりぬ

されば国の明日を担ふ若き世代の「こころ」を磨き育くむべき公教育にありても　後知恵の「平和」観念を教条的に説くのみなれば　国に尽くせし先人のみこころの裡を憶念することの少なく　かくして仰ぐべき規範を見失ひ公私のけじめを喪失し　忌まはしき通り魔殺人事件の頻発をみるに至れり

さはあれども　ここ伊勢の地にて朝毎に神つ宮に額づきて　遠きみ祖たちのひらきましし国振りの　今の平成の御代に伝はり来たれるをうつつに覚らしめらるるは　深き大きよろこびにして　さらにまた藤原の京にて天下知らしめしし高天原

広野姫天皇（持統天皇）の御代に　始りて千三百有余年　回を重ねし御遷宮の　今上の御代に至りて平成二十五年の秋に六十二回目を迎へんとするを　また御遷宮に先立ちし種々のみ祭りの　厳かに修められつつあるを耳にしまつるは　み祖のみこころの変りなく受け継がれつつある確かなる証にほかならずと　身の震へ覚ゆるを抑へ難し

顧みれば古今東西を問はず後の世代が父祖の功業を範と仰ぐは人の道の基本にして　ことのほかにも古き伝統の生き続くる我が国にありては　政治と教育の根本が父祖伝来のみ国振りに基づくべきは当然至極のことなりき　今にして戦後体制の頸木より脱せざれば　自由闊達なる国民精神の回復は図られるべくもあらずと　改めて覚らしめらる

今次の合宿教室におきても　我が国をめぐる現下の国際情勢に思ひを凝らしつつ　御製に大御心を仰ぎ　聖徳太子の御思想に学び　古事記のみ文を味はひ　ヤマトコトバの修練を積みて短歌の創作に励みし所以はほかなし　かく努めてこそ「み祖たちのみこころ」に添ひまつる道筋なるべしと　足らはぬながら思ひ及びしが故なり

もとより力足らざる我らにはあれども　大御歌を仰ぎ汝み祖たちのみ言葉に大きみ力を授けられしを身に覚えつつ日々の学業に生業に勤しまんと決意せしを見そなはしまして　我らが行く手を　常に照らし導きましませと　参加者一同に代はりて　山内健生　謹み敬ひ恐み恐み白す

平成二十年八月二十三日

**御製拝誦**

明治天皇

社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ（明治二十四年）

道

千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり（明治三十六年）

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ（明治四十五年）

をりにふれて

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり（明治四十五年）

昭和天皇

神嘗祭に皇居の稲穂を伊勢神宮に奉りて

我が庭の初穂ささげて来む年の田の実いのりつ五十鈴の宮に（昭和三十一年）

明治神宮鎮座五十年大祭

おほぢのきみのあつき病の枕べに母とはべりしおもひでかなし（昭和四十五年）

式年遷宮

秋さりてそのふの夜のしづけきに伊勢の大神をはるかをろがむ（昭和四十八年）

旅

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく（昭和六十年）

今上天皇

昭和天皇崩御後初めて明治天皇例祭に参りて

今の世の国の基の築かれし明治の御代を尊みしのぶ（平成三年）

阪神・淡路大震災

なゐをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき（平成八年）

歩み

戦なき世を歩みきて思ひ出づかの難き日を生きし人々（平成十七年）

### 班別懇談

慰霊祭の後、各班では最後の夜の懇談が行はれた。さし入れられた缶ビールを飲みながら、まるで昔からの友人のやうに班の友らと夜更けるまで思ひを語り合った。

## 第四日目　（八月十九日・日曜日）

### 合宿を顧みて

先づ初めに登壇した澤部壽孫副理事長は、合宿導入講義の中で出てきた樋口一葉の『塵中日記』に触れ、「一葉の時代の帝国議会は現在の国会とよく似てゐるが、決定的に違ふのは『自分だけ傍観するわけにはいかない』といふ一葉の態度に見られる強い気迫が広く国民に存在したことである」と述べ、一葉の和歌や防人の歌を挙げながら「名も無き先人がどのやうな心持ちで国家を守ってきたかを感じ取って欲しい、また今に残る多くの歌や文章から先祖の真心を感じたと思ふが、さう感じた心を今後も大切に育んで行って欲しい」と呼び掛けた。

次いで折田豊生合宿運営委員長が壇上に立って「多くの講義から、先人が我々に託した様々な課題に気づいたと思ふ。ここで

学んだ多くの仲間とともに、切磋琢磨しながら、一つ一つの課題を解決して行かう」と訴へた。

## 全体感想自由発表

挙手して壇上に上った参加者は合宿で得た「宝物」を、熱く、或いは訥々と壇上で語った。「伊藤哲夫先生に『平成の井上毅になれ！』と言はれ、目の醒める思ひがした」「吉田松陰の弟を思ふ気持ちの深さに心打たれた」「『内なる国家』といふことをずっと自分に問ひ続けた。内なる国家には真心が詰まってゐると思ふ」「五十鈴川に昨日からの雨で水が満ちたやうに、自分の心にも国を思ふ気持ちが満ちてきた」「短歌の相互批評で皆が自分の気づかなかった点を指摘してくれて、素晴らしい歌になった。一生の宝物にしたい」「天皇の御歌は知識としては持ってゐたが、心に迫って感じられた」「国を思ふ心を学んで、勤務先の創業者が敗戦後の国土の緑化に尽した心が偲ばれた」「一人で頑張るのではなく、皆と心を一つにすることが大事だと思った」……と次々に登壇して思ひを述べた。

## 閉会式

主催者を代表して今林賢郁副理事長は「思想的混迷を極める戦後体制の中で、次代を担ふ若い諸君に志が繋がればこの国が揺らぐことは無い。その一念で五十三年間、合宿教室は続けられて来た。我々も今のこの時代において、国のことに思ひを馳せて考へる仲間でありたい」と一人びとりが国を支へる志を持って生きて行くことの大切さを説いた。続いて参加学生を代表して杏林大学四年の松井宏太君が「国のために勇敢に戦ふ松尾大尉の勇姿に心をうたれ、少しでも見習ひたいと思った。また今回の合宿で新しく友ができ、これからますます友情を深めていきたい」と合宿の感想と今後の決意を語った。そして亜細亜大学三年の青砥諒典君の閉会宣言を以て第五十三回全国学生青年合宿教室の全日程は滞りなく終了した。

## 助言者の紹介

| | |
|---|---|
| ㈳国民文化研究会　理事長 | 上村　和男 |
| 元・日商岩井㈱ | 澤部　壽孫 |
| ㈱伊勢利　代表取締役 | 今林　賢郁 |
| 元・㈱講談社 | 磯貝　保博 |
| 拓殖大学日本文化研究所　客員教授 | 山内　健生 |
| ㈳国民文化研究会　事務局長 | 稲津利比古 |
| ㈱寺子屋モデル　代表取締役社長 | 山口　秀範 |
| 元・小田原市立矢作小学校長 | 岩越　豊雄 |
| 東急建設㈱常務執行役員 | 奥冨　修一 |
| 元・新潟工科大学　教授 | 大岡　　弘 |
| 福岡県立大宰府高等学校　教諭 | 占部　賢志 |
| 山口県立熊毛南高等学校　教諭 | 寳邉矢太郎 |
| 新明電材㈱　常務取締役 | 飯島　隆史 |
| 興銀リース㈱ | 小柳志乃夫 |
| ㈱ＩＨＩエアロスペース | 内海　勝彦 |
| 日章工業㈱　代表取締役社長 | 藤新　成信 |
| 元・日産自動車㈱ | 古川　　修 |
| 福岡県立直方高等学校　教諭 | 小野　吉宣 |
| 熊本市役所 | 折田　豊生 |
| ＮＰＯ法人教育オンブズマン顧問 | 稲田　健二 |
| 元・日立プラント建設㈱ | 日高　廣人 |
| 元・キューピー㈱ | 山本　伸治 |
| ㈱バントレーディング | 森重　忠正 |
| 日揮㈱ | 江口　研治 |
| 元・富山県立富山工業高等学校　教諭 | 岸本　　弘 |
| 協同組合ＡＡＡ | 内田　巌彦 |
| 神奈川県立新磯高等学校　教諭 | 原川　猛雄 |
| 国立病院機構　都城病院・院長 | 小柳　左門 |
| 産経新聞社正論調査室・雑誌「正論」販売部 | 大内　保治 |
| ㈶都市防犯研究センター | 小田村初男 |
| 九州大学大学院　教授 | 清水昭比古 |
| ㈱ケイエヌラボアナリシス | 天本　和馬 |
| 出雲神々縁結びの宿　紺家　会長 | 青砥　誠一 |
| 鳥栖市役所 | 西山　八郎 |
| 損害保険料率算出機構 | 鎹　　信弘 |
| 若築建設㈱　東京建築支店作業所長 | 池松　伸典 |
| 北九州市立医療センター　技師 | 森田　仁士 |
| 福岡県立香住丘高等学校　教諭 | 酒村聰一郎 |
| 防衛省航空幕僚監部 | 神谷　正一 |
| ＩＭＳグループ本部　総合企画部 | 最知　浩一 |
| ㈱アルバック | 北浜　　道 |
| 藤村酒造㈱ | 藤村　孝信 |
| 平山直樹税理士事務所 | 北村　公一 |
| ㈱寺子屋モデル　講師 | 三林　浩行 |
| ハローワーク大牟田 | 古川　広治 |
| 調神社権禰宜 | 岸野　克巳 |

アサヒ飲料㈱　澤部　和道
日本青年協議会　外村　聖典
㈱寺子屋モデル　講師　横畑　雄基
ラックホールディングス㈱　高橋俊太郎
伊佐ホームズ㈱　小柳　雄平
西日本電信電話㈱　武田　有朋
㈱寺子屋モデル　黒岩　礼子
日本青年協議会　三萩　祥
下関国際高等学校　秋田　崇文

**合宿運営本部**　折田　豊生・飯島　隆史・池松　伸典

**指揮班**　古川　広治・北村　公一・三林　浩行
小柳　雄平・秋田　崇文

**唱歌指導**　森田　仁士

**事務局**　稲津利比古・山本　伸治・漆原　弘子
天本　和馬・高橋俊太郎・幸田　靖子
裾市立須山中学校　幸池美佐子
糟屋郡篠栗中学校　中村　遥哉
埼玉県北本市立宮内中学校　最知　雄飛

**写真班**　高橋俊太郎・最知　浩一

# 走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。

## 第一班―男子学生―

### 先人の生き方に学び己自身も精進したい

（国学院大学　文・史　一年　相澤　守）

私はある日、大学の図書館で本合宿のチラシを見つけました。大学に入学して国史を学んでいましたが、大学の講義には物足りなさを感じていました。すなわち、先人の日本に対する思いや祖国日本がどのような国であるかや倭心について具体的に触れる機会がなかったのです。そこで私はすぐにこの合宿に参加することを決意しました。

まず参加してみて感銘を受けたのは、先生方の熱心さや日本に対する思いの深さでした。それに加えて、いずれのご講義も魅了されたり、考えさせられたりするものばかりでした。いくつか例を挙げると、小柳左門先生のご講義では、自分も本居宣長のように古事記を通じて倭心を明らかにし、身に付けたいと感じました。また、伊藤哲夫先生のご講義では、井上毅の日本の近代国家建設という国の大事業においても「しらす」という古の言葉を憲法に用いようとした精神と人間性の高さに驚きました。さらに、占部賢志先生のご講義では、いかに「私」の世界が大切かと吉田松陰の生き方を通して学びました。

そこで私も国家の一助となるべく、まず私生活を正し、己を見つめ直そうと感じました。そして短歌創作では素直さを表現するという日本の伝統の素晴らしさに感激し、短歌相互批評では、班員の歌を味わいつつも、それをさらによくしていこうと班一体となって議論する有意義な時間が今でも忘れられません。

最後にこの合宿で一番うれしかったことは、志を同じくする沢山の先生方や友達に出会えたことです。この同志達に負けないよう、自分も日々精進を積み重ね、来年またこの合宿でお互いに一層の成長を遂げた姿を見られることを切に願います。

合宿の終わりに望みて

仲間との惜別の時目の前に我が心には杭刺さり来る

### まずは修身を心がけたい

（京都大学　工学　二年　馬場　惇）

今回、二度目の合宿教室に参加させていただいて、とても充実した日々を過ごさせていただけたと思います。なぜなら、この合宿を通して自分がやるべきこと、やらなければならないことを学べたからです。

占部賢志先生のご講義の中で、吉田松陰の私に心を尽くす姿勢を学びました。あれほどの公での活躍は、この私に尽くす心があるからこそ成し遂げられたのでしょう。これまでの講義を拝聴して、自分には何ができるのか、まず何から始め

たらいいのかというもやもやとした気持ちを持っていたのですが、この吉田松陰の姿から、今やるべきことは、自分自身の身を修めることであると感じました。学業は勿論のこと、日々の生活態度から改めようと思いました。

このような充実した四日間を過ごさせてくれた仲間や先生方、運営の方々に感謝したいです。

友どちと夜の更けるまで語り合ひ渇きし心の満たされにけり

## 合宿を機に今後いかに生きるかを考えたい

（中央大学　理工　四年　中村仁宣）

この合宿教室を訪れて、今では本当に来て良かったと心から思えます。先生方の古事記や聖徳太子、更に「内なる国家」をはじめとする素晴らしい講義に心を打たれ大変感銘を受けました。古くから伝わる日本人としての心や、精神というものを再確認させられました。特に考えさせられたのは、伊藤哲夫先生の「国家の自立」とはどういうことかについてでした。「国家の自立」は時の流れにより、もはや日本だけで物事を考えられなくなっているとの現状があることです。つまり、グローバル化が進む上で、グローバリゼーションは切っても切り離せなくなってきています。

しかし、そのような中で、埋もれつつある日本の大切な心や精神とこういう時にこそしっかり向き合わなくてはならないと実感しました。また、講義で紹介された皇后陛下の「外

カメラ・レポート1

主催者を代表して上村和男理事長は「この合宿では、二千年の歴史を持つ我々日本民族の歩んで来た道を顧み、祖先がこれまで伝へて来た言葉や文化をもう一度見つめ直して、日本人とは何かを深く考へる切っ掛けにして欲しい」と挨拶した。

国の風招きつつ国柱太しくあれと守り給き」と詠まれた御歌と、仁徳天皇が炊煙のあがらないことを心配なされ、国民の課役を免じられたという話から、外国から迫りつつある日本の危機だけでなく、日本を支えている国民にもしっかり目を向け常に耳を傾け、気になされている様子に大変感動し、これは日本にしかない心だと率直に感じました。

私はこの合宿でたくさんのことについて学ぶことができました。これは他には代えられない大切な体験であったと思います。この合宿を通して、今、そしてこれから私自身、日本の将来を支えていく一人として今後どうしていくべきなのかという課題と向き合っていきたいと考えています。

短歌とは己の心のあらはれて皆に正され輝くものなり

## 和歌を通して先輩方の気持ちに近づけた

（立命館大学　聴講生　坂　直純）

昨年初めてこの合宿に参加させていただき、今回で二回目となります。講師の方々のあふれる思いや、涙を抑えきれず語る姿に、感動と共に憧れる気持ちを抱きました。それは去年の合宿でも感じたことでした。しかし、今回は先生方のあの涙にはどのような心情があるのだろうと気になっていました。

上述の先生方の心情を垣間見ることができたのが、この合宿地にまで来ることができなかった先輩方の和歌でした。とりわけ宝辺正久先生の歌に心がうちふるえました。歌の中にある「いま負ひてゆく友ら」と「道歩みこし戦後の年月」との言葉に非常に強い思いを感じました。

日本の命運を背負ってこられた方々から、本当に自分たち若い世代がバトンを受け取っていくときにあると痛感しました。今回合宿に参加して、先生方の涙があふれんばかりの講義を受けることができました。また本当に大切にしていきたい歌に出会うことができました。そして気持ちのいい班員と寝食を共にできました。どうもありがとうございます。

継承

信念は信念持てる人々の姿通じて伝はりゆかむ

## 友の言葉で初心を取り戻す

（TAC公務員講座　受講生　宮地順造）

今回で私の合宿参加回数は四回目となる。本合宿では、普段の生活では考えもしないようなことを学ぶことができる。しかし、参加回数を重ねるごとに、合宿で抱いた感動の度合いが年々減っていることは否めない。慣れということもあるのだろうが、初参加の時と今回を比べてみても緊張感や熱意を失いつつあるような気がしていた。

そのような心境の中、班員の相沢守学兄の「大学の勉強のみでは物足りないから合宿に参加した」との言葉は、私が合宿に望むにあたって忘れていたことであった。現状のみでは

満足できない、さらに日本について知りたいという知的好奇心を持ち合宿に望んでいた昔を思い出した。

そういうわけで、まずは初心に返り、日常生活でも現状維持ではなく、忙しいことを言い訳にせず、さらなる学問の研鑽に励んでいきたい。

短歌相互批評の折に

寝不足を耐へ忍びつつさまざまに意見を述べあふ御友らたのもし

## 渇いた心に清流が流れ出した

（元・日産自動車㈱　古川　修）

「昨夜からの雨で、五十鈴川に流れが戻った」と、小柳左門さんから聞き、今朝、不思議な思ひにかられた。「全体感想意見発表」の時にも語られたが、渇いた心に清流が流れ出したといふのが、正にこの合宿であった。毎年思ふことではあるが、発表者のあふるる思ひに、四日間の「営み」の尊さを痛感する。

同じ班の相沢守君が、とつとつと自分の思ひを語ってくれたことは、本当にうれしかった。東京に、また一人、新たな友ができたことをうれしく思ふ。

折田運営委員長他、合宿に向けてこの一年ご尽力いただいた諸兄に改めて深く感謝いたします。

相沢守君の発表を聞きて

緊張に身体ふるはせ壇上に昇る姿のたのもしく見ゆ

カメラ・レポート2

オリエンテーション。折田豊生合宿運営委員長は、合宿を始めるにあたり「“話す”ことより、むしろ人の話をよく“聴く”ことに重きを置いて、お互いに相手の立場に思ひを寄せながら話し合ふやうにして下さい」と語った（右）。次に、古川広治指揮班長からは合宿生活に関する諸注意が説明された（左）。

とつとつと感動せしこと語りゆく友の言の葉聞くぞうれしき

## 第二班―男子学生―

### その時、私の中で稲妻が走りました

（杏林大学　総合政策　四年　松井宏太）

私は第五十三回全国青年合宿教室に参加させていただき、最も心に響いたのは、小柳志乃夫先生の創作短歌全体批評です。小柳志乃夫先生は、

「歌は具体的に読まねば、伝わらないよ。」

と語られました。

その時、私の中で稲妻が走りました。歌は、具体的に詠まないと、相手に伝わらない。また、それだけでなく、自分が、その時、何を、どのように思ったかをしっかり表現することにより、自分の心の鏡が見えてくるのだと感じたのです。

私は、この貴重な体験を生かし、短歌を今後も作っていこうと思います。

見上ぐれば雲ひとつなき空広がる故郷の親も見てゐるのかな

### 地に足のついた国家への信を培いたい

（首都大学東京　法　四年　和田浩幸）

昨年度の合宿教室に参加した折の感動が忘れられず、今回二度目の合宿参加となった。

導入講義で「内なる国家」ということが提示され、概念では括りきれない、瑞々しい感動を持って、日本の在り方を考えようとの問題意識に立って合宿に臨んだ。昨年同様、多くの感動があったが、とりわけ、二人の人物の姿に自分の感動が収斂されていった様に感じる。

一人は、占部賢志先生の講義における吉田松陰の姿である。占部先生は、勤皇の志士・革命家としての松陰像とは異なる松陰像、即ち家族の風景の中の松陰像を提示したいと冒頭仰ったが、講義を受けて、弟・敏三郎を思いやり続けた優しき兄としての松陰と志士としての雄雄しい松陰の姿は、かけ離れたものではないということ、「私の世界に心を尽くした人こそ公に尽くすことができる」ということの意味が実感された。『夢を記す』に書かれるように、家族が皆で声を出して、詩を朗誦する姿を松陰は願っていたのだと思った。言葉を話せない敏三郎が、いつか話せるようになって、共に学びの道に分け入っていきたいという切実な思いが伝わってくる。この家族の理想像を描き、弟の障害が無くなるよう祈る姿と、国を憂い現実に立ち向かった行動家としての姿は、いずれも松陰の真実の姿なのだと思った。もう一人印象に残った人物は、井上毅である。儒学、洋学、漢学、国学とあらゆる学問を探求した人物だが、一貫した日本への信があり、それが人生を懸けて明治憲法を作成した原動力だったのだと感じた。

伊藤哲夫先生は「君が現代の井上毅になれ」と質疑応答である学生に仰ったが、その言葉を自分自身にも突きつけられた言葉として受け止めたい。「日本思想が主流となったことは一度もない」とも言われたが、当に自分自身が地に足のついた国家への信を培いたいと思う。日本人として如何に生きていくべきかということは、如何にして自分の心に日本人としての感性を持っていくかということだと思うので、国文研の先生方が大事にされてきたしきしまの道の伝統、友と共に学び続けるという姿勢を胸に、自分自身が大学生として果していくべき使命とは何か、考え、行動していこうと思った。

吉田松陰先生と弟・敏三郎の永訣の時を思ひて

聴えざることわかれどもやみがたき思ひ募りて言葉託さる

伊藤先生の質疑応答において

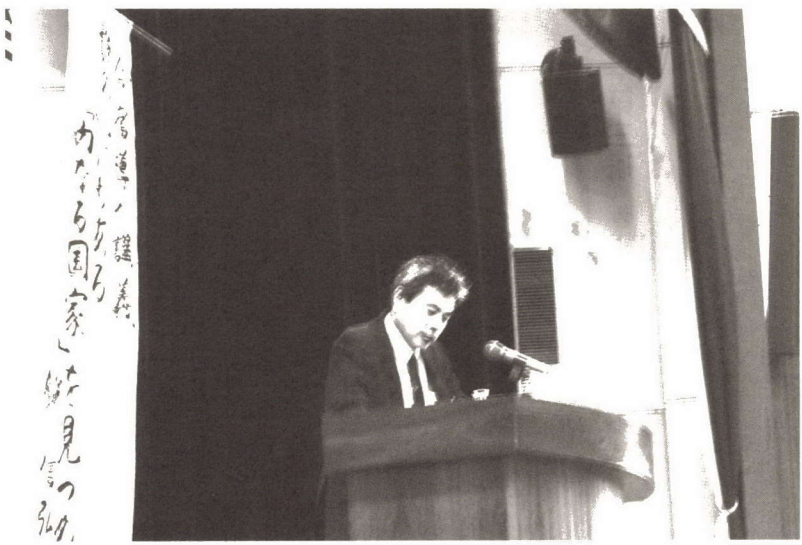
現代の井上毅になれかしとの大人（うし）の御言葉我忘れめや

## 来てよかった

（亜細亜大学　法　三年　青砥諒典）

今回、合宿に参加したのは二回目で、前回大変な思いをしたのにも関わらず、二回目も参加してしまいました。そして今回の合宿も本当に大変でしたが、やはり最後は来てよかったという気持ちになり、夏休みの良い思い出になりました。今回もなぜか来てゐる合宿になぜに来たのか不思議に思ふ

カメラ・レポート3



合宿導入講義。元防衛省・損害保険料率算出機構　鎹信弘先生は樋口一葉の『塵中日記』に触れながら、当時無名の21歳の女性が国の行く末を深く案じてゐた様子や、大車亜戦争中、勇敢にも特殊潜航艇でシドニー湾に潜入して敵鑑と戦い自決した松尾敬宇大尉を紹介され、「わが国には大変素晴しい内なる国家といふものがある。それをこの合宿で是非感じ取って貰ひたい」と話された。

## 和歌を詠み続けたい

（早稲田大学　政治経済　一年　小川公一）

今回、父の勧めで半ば強制的に送りこまれて、合宿に参加しました。

父から和歌の創作があると聞いていたので、非常にこの行事を恐れ、できることなら避けて通りたいと思っていました。しかし、実際に和歌の創作を経験してみると、その面白さに気づきました。合宿二日目の伊勢神宮散策で拝見した御饌殿（みけでん）の屋根に青々としたこけが生えていました。人工物である御社と自然の緑であるこけの調和に感動したので、次のような短歌を詠みました。

大木で建てし社のこけむす屋根を見て我思ふ美しきかな

人生で初めて詠んだ歌ですが、自分の中ではなかなかの出来栄えだと思っておりました。しかし、班別短歌相互批評の場で、「印象に残ったのは屋根だけなのか」「こけはどんな色をしていたか」など自分の気が付かなかった点を同じ班の仲間や、部屋にいらっしゃった先生方に指摘され、次のように歌は変わりました。

青きこけ生えたる屋根の御饌殿（みけでん）の美しく建つ伊勢の森中

多くの人々のお陰で出来上がったこの歌は、私の人生の宝の一つです。和歌という、心を見事に表す芸術を、詠み続けることで、私の中にもある日本人の心をこれからも磨いていこうと思います。

友達と過した楽しき伊勢神宮思ひ返して朝日が昇る

## 心を働かせる学問を続けその輪を広げたい

（㈱アルバック　北浜道）

講師の先生方の、御講義中の聴講者に寄せるちょっとした心づかひに触れる度に、涙がこみ上げてきてならなかった。短歌創作導入講義で内海勝彦先生が、この合宿教室で目指す短歌が、現代短歌通有の個の芸術でなく、人と人との心が結ばれていくところにある旨話されたのが、大変心に残った。知識の集積でなく心を働かせる学問を、これから続けていきたいし、その輪を広げていきたい。

班別短歌相互批評の折、班に来られた澤部壽孫先生の批評に触れ

まごころを言挙げするより黙しつつ敵艦に向ふがよろしからずや

師の君の御言葉を聞き心より目を開かるる心地するかも

# 第三班―男子学生―

## 初めての班長を体験して

（九州工業大学　情報工学　四年　鷲頭祥平）

私は今回の合宿で初めて班長をさせていただきました。班内で互いに自己紹介を行ったとき、私は知識も経験も意気込

みもバラバラな班員たちをまとめることができるか不安でした。しかし、最初の班別研修から率先して意見を言う班員の姿や、分からないことがある班員に対して分かりやすく説明してくれる班員の姿、普段はあまり意見を言わなかったけれど最後の御講義では率先して意見を言ってくれた班員の姿を見ていると、最初に感じていた不安はすっかりなくなり、この班にめぐり合うことのできた喜びを感じました。

知識も経験も未熟な自分が班長をやりとげることができたのは班員全員のおかげです。また、班付として様々な面で助けてくださった山口秀範さん、そして、この合宿の運営委員のみなさんのおかげですばらしい体験をすることができました。ありがとうございます。

お互ひに支へ合ひつつ乗り越えし三泊四日は一生の宝

## 言葉の大切さを学んだ今合宿

（國學院大學　文　三年　坂本匡史）

私が今回の合宿で最も感動したのは小柳左門先生の御講義だった。小柳先生の御講義のテーマは「よみがえる古事記」であったが、まさに二千年の時を越え小柳先生の口から古事記がよみがえるような心地であった。特に倭建命の最期には涙があふれそうになった。このように昔の人物の心に迫ることができるのは本居宣長を代表とした多くの日本人が古の言葉を大切に守りぬいた努力の結晶なのであろう。私達も漢意

カメラ・レポート4

歴史講義「よみがへる古事記」で国立病院機構・都城病院長小柳左門先生は、「夜久正雄先生著『古事記のいのち』の一節を読み上げ、古事記こそ日本の大和言葉のしをりであり、そこには日本人のまごころがすべて通ってゐるのです」と指摘された。

を清く離れて日本人の心のふるさとである古事記に思いを寄せねばならない。

今回の合宿では歴史とは言葉を守っていくことなのだと実感した。一つ一つの言葉に込められた願いというものをを共有していくよう私自身、努力したい。

古事記を読むことができるありがたさを詠みて

万代の後伝はりし古の言葉を聞けるありがたさかな

## いろいろな講義が聞けてよかった

（藤沢翔陵高等学校　二年　須藤慶一郎）

僕は、父親にこの合宿に「行け」と言われて、いやいや参加し、早く終わらないかと思っていました。

しかし、合宿に行ってみたら、いろいろな講義が聞けて、班の仲間とも話ができたのでとてもよかったです。

特に印象に残っているのは占部賢志先生の講義です。吉田松陰が、生まれつき耳がわるかった弟に手真似などで合図をして、やさしく接したことがわかり、自分もそういうふうに接しようと思いました。

また、短歌を作るのが生まれて初めてで苦労したけど山口秀範さんや班の仲間がサポートしてくれたのでじぶんでも納得できる短歌を作ることができてよかったです。

朝早く海のかほりする神宮に参拝をして気持ちよく思ふ

## 貴重な宝物となった三泊四日

（日本大学　商　一年　宝辺壌治）

私は、この合宿に参加するのが嫌でした。また、開会式で国歌を歌ったときは変な宗教団体のように感じました。しかし、講師の方々の御講義が始まれば自然とそのような思いは消えていきました。私には難しい御講義もありましたが、講師の方々の熱意には感動しました。また、同じ班員が自分の考えを述べる姿にも感動しました。私も彼らに追いつくために本を読む習慣を身に付け、様々な言葉を覚えていかなければならないと思いました。

また、今回の合宿で初めて短歌を創作しました。祖父が私に手紙を送ってくれるときはいつも短歌を一緒に送ってくれ、私を元気付けてくれていました。しかし、実際に自分で短歌を作ってみると思っていた以上に難しいものでした。

この三泊四日はこれからの大学生活にとって貴重な宝物となると思います。

父親にいやいや誘はれし合宿も帰る頃には貴重な体験

合宿の講師の御言葉身にしみて価値ある講義を我は忘れじ

## 自らの行ひを見つめ直したい

（明星大学　日本文化　四年　宮川拓也）

上古・近代の偉人・若者を見た上で現代に生きる己がいか

に行動し、どのやうな信念を持つべきであるかといふことが重要である。私は、元来の気性が内に向かひやすく、他者との交はりを避け、自らの思ひの中に沈んで行く事が多い故に、このやうな様々な年代・学校・仕事をなさってゐる方々と会ひ、その人に応じた日本への思ひを語らふ機会が訪れたのは真に素晴らしき事である。私の持つ言葉・知識を外に向けて発信するには、時期尚早ではあるが、今後の実生活や今回のやうな特別な体験の中で自らの行ひを見つめ直したいと思ふ合宿教室であった。

私を含めた多くの学問の徒へ、私の師と仰ぐ人の言葉を記したいと思ふ。「我々、学ぶ者の売り物は、頭であり、知識である」。今後もお互ひに精進していきませう。

えにしとは昔の我が身をうつすかげ心流れてまためぐり逢ふ
いづれの世いづれの時にまた会はん燃ゆる心をうつす友どち

## 「言葉」の重みを知ることができた

（東京大学　教養　二年　室園隆大）

私は今回の合宿で特に先人の「言葉」に対する思いに感動しました。「言葉こそ大切にすべきだ」という歴史の本質に対する認識が示されている、とおっしゃった小柳左門先生の御言葉には深く感銘を受けました。また、伊藤哲夫先生が井上毅の御講義で紹介された「知らす」という言葉から、いかに日本という稀有な国が輝かしくありがたい歴史を有してい

カメラ・レポート5

講義「国家の『自立』とはどういふことか」で日本政策研究センター代表伊藤哲夫先生は、「大日本帝国憲法」の成立過程における井上毅の果した役割に言及され、ドイツ・イギリスの憲法思想を研究する一方で国学の文献を渉猟し、遂に「しらす」こそが天皇を戴く我が国の国柄を表現し得る語であると確信を持つに至った経緯を文献を示しつつ詳述された。

るかということを知りました。その後の短歌の創作、班別批評では自分の感動を三十一文字の言葉で表現することの難しさを実感しました。班別輪読では、輪読箇所を仲間と一緒に一つ一つじっくりと読み込むことでわずか一ページ半の文章の中にどれだけの思想・哲学が描かれているかということを思い知ることができ、「言葉」に真摯にあたれば先人の「意」を知ることができるという得難き感動に心を打たれました。

「古事記」をよみがへらせたる本居宣長
言を尊び古事記を伝へたるその姿にぞ心打たるる

井上毅卿に学びて
「知らす」てふ言葉に当てし光こそ吾が国のかたち照らし出すなれ
言の葉の重みに
先人の尊び給ひし言の葉のまことに触れつつ我ら生きなむ

## 第四班—男子学生—

### 合宿で学んだことを活かしていきます

（玉川大学　経営学部　三年　豊田隼史）

私は父の強い勧めを受け、この合宿に参加しました。正直なところ、私は初めそこまで乗り気ではなく、どんなことを勉強するのかということもあまり知りませんでした。しかし、合宿が始まり、班員と友達になることができ、不安はなくなりました。講義の内容も心うたれるものばかりで、特に三日目の占部賢志先生による吉田松陰の兄弟愛のお話は印象深かったです。

私の班のメンバーは意識の高いひとばかりで、自分の知識の無さ、語彙力の無さに情けなくなりました。本気で「もっと勉強したい」「日本国民としてこの国のことをもっと知りたい」と思うようになりました。この合宿での経験、受けた刺激を大切にし、これからの生活に活かしていきます。

合宿を終へて
伊勢の地に集ひし友に学びしをこれより先に活かすと誓ふ

### 新しい考え方ができるようになった

（日本工学院専門学校　一年　池松敏生）

始めは、父からの強制で、嫌々ながらの参加でした。鬱々とした気分を少しでも和らげるため伊勢という土地と出される食事を楽しみにすることにしてやって来ましたが、同じ班員となった人達との交流や、先生方の講義はとても良い刺激になり、新しい考え方ができるようになりました。今ではこの合宿に参加して良かったと思います。

町で見し木々よりはるかに巨大なる木が幾本も並びそびゆる

## この経験を今後の人生に生かしていきたい

（杏林大学　総合政策　三年　上宮朋広）

この国民文化研究会全国学生青年合宿教室に初めて参加して私が感じた事を一言で言うと「衝撃的な合宿」でした。講義で特に印象深かったのは、小柳左門先生の「よみがへる古事記」や伊藤哲夫先生の井上毅がどのように日本という母国を思い帝国憲法にすべてを捧げた事など、現在私へのメッセージになるものや日本人として日本の古の尊さを感じさせてくれるものでした。普通では学べないものばかりで幸せでした。

また、四班に属した私は班長の谷口耕平先輩、平田無為先輩、他の班の仲間の知識の深さに感銘を受けました。さらに、班別研修において自分の思いを言うのに語彙力が欠けているのを感じ、自分は今まである意味での〝ぬるま湯〟に浸かっていたのだなと実感しました。普通では聞けないこのお話を多くの人に聞いてほしいと思いました。また、この経験を今後の人生に生かしていきます。

第五十三回全国学生青年合宿教室を終へるにあたって

研修で頭を使ひ話し聞きこの伊勢の地で思ひめぐらす

## 楽しい合宿でした

（九州工業大学　情報工学　三年　谷口耕平）

今回で三度目の合宿となりました。今回は楽しい合宿でし

朝の集ひにて、体操を行ふ。

た。多少慣れて、余裕が出て来たという事でしょうか。しかし、楽しいと言いましたが、その始まりの鎹信弘先生の御講義を聞き、迫りくる中国の脅威を知り、自分の中に「内なる国家」を見つめて行こうという緊張感を持ってのスタートでした。

また、今回の合宿は初めての班長として参加しました。不安に思う所もありましたが、あまり欲張らずにやろうという気持ちで臨みました。良い班長であったかは僕にはわかりませんが、班員の感想文を読めばわかるのではないかと思っています。

今回の合宿を日々の生活で活かし、学び続けて行きたいと思います

「来年も来ます」と友の返したる言葉を聞けばうれしかりけり

## 「美しい日本人」と出会えた

（福岡教育大学　大学院　一年　平田無為）

いさましき倭建命の悲しみも恨みも隠さずあらはされしか

今回の合宿で相互批評していただいた完成版の和歌です。倭建命の生き方は、今合宿を通じて非常に大きな衝撃でした。

私は昔から「こうしなければいけない」という考えに凝り固まってしまうことが多々あります。そのため、よく物事を「こう考えなければならない」「この人にあわせよう」と考えてしまい、責任感や義務感のみで動き、自分の中のみずみずしい感性を押し殺していたように思います。他人に対してもそうした事を要求してしまうこともありました。しかし、この倭建命は、全国統治の使命をうけつつも、苦しい事、悲しい事を言葉にされており、本居宣長は、それを〝人の真心〟であるとのべられました。私はこの姿に、いさましさのみならず、その中にも人間としてのみずみずしい真心を大切にされて来た日本人の姿を見ました。これまでいさましさばかりに目を向けてきましたが、真心を大切にする日本の〝英雄〟に「美しいなあ」と感じました。「強き日本人」「たくましき日本人」をこれまで幾度となく見ましたが、改めて「美しい日本人」と出会えたように思います。

まことなる思ひのべたし何時も倭建命の心偲びて

全体感想発表にて日下部さんの話を聞きて

「やり方」を求むる前に日本人の「あり方」問ひし日々を送らむ

谷口耕平くんの「あやまちをいさめかはしてしたしむがまことの友の心なるらむ」の御製拝誦のおりに

いねむりをおこしたまふは友どちのまごころなりやと思ひおこせり

## 第五班―男子学生―

（西日本電信電話㈱　武田有朋）

今回の合宿には、社会人となつて初めて全日程の参加を果

たすことが出来た。立場が変はつての合宿は、学生時代とはまた随分と違ふ味はひのものであり、自らの生き様を反省し、新たな決意を得ることが出来た素晴らしいものであつた。

日頃の仕事においては、己の業務を如何に片付けるかといふ技術的な部分に注意が向きがちである。しかし、我々のやうな若い人間は我が国、或いは己の会社が今後如何にあるべきか、如何なる方向に向かふべきかを考へてゆかねばならない。そこで問はれるのが、己の人生観、国家観なのだと、一つの会社に身を置く今、痛切に感じてゐる。私自身、仕事を口実に学問を怠りがちであつたが、今合宿に参加する事で日々の学問を続けてゆかうと決意を新たにした次第である。

また、今合宿においては、占部賢志先生の「『私』に心を尽くした人こそ、『公』にも心を尽くすことが出来るのだ」といふ言葉が印象に残つてゐる。誠にその通りのことで、私もこの言葉通りの生活を実践してゆかうと強く感じてゐる。先達、諸先輩方の道統を受け継ぐべく、更に自己研鑽に励んでゆきたい。

『私』に尽くせし人ぞ『公』に尽くしたるとて師の君宣ふ
我もまた師のみ言葉のそのままに生きてゆかむと思ひ定めぬ

## 日常では得ることの無い経験を得ることが出来た

（杏林大学　総合政策　三年　工藤博志）

今回参加したきっかけは友人である松井宏太君の軽い悪戯

カメラ・レポート7

短歌創作導入講義。（株）ＩＨＩエアロスペース　内海勝彦先生は「短歌創作の心構へとして、自らの感動を心に甦らせ、それを的確な言葉で表現することが大切であり、それを繰返すことで歌が上達していくと」語られた。

心ある勧誘であったが、合宿最終日である今日を迎えてみると非常に有意義なものであった。

見ず知らずの人達と三泊四日の共同生活に始まり、日本の歴史等に学校とは別の視点からアプローチし、新しい感覚を得たり、短歌創作で皆で検討することにより、他人の考えを知る機会を得る等、流されるままに過ごす様な生活では得ることの無い経験を、例え受動的であろうと得ることが出来たということが今回の合宿における最大の喜びである。

もちろん、自ら反省すべきだと思い知らされた事もある。初対面の人との関係は面白いものであり、就寝前の会話等で熱中するあまり、相手の睡眠時間を削り、無理をさせてしまった事等である。

万事において上手くいったわけではなかったが、失敗も成功も含めた上で自分にとって得るものの多い合宿であった。人生はまだ長いが、今回の経験を上手に生かしていけるようにしたい。

合宿で様々な人と関はって
得ることも得られぬことも多けれど無駄なこと等何一つ無し

## 充実した四日間となった

（大阪工業大学　情報　二年　戸田憲太郎）

今回のこの合宿には、親が自分の知らないうちに申し込んでしまったので、参加せざるをえないことになってしまった。おまけに初めてこの合宿に参加するということも相まって、とても緊張する足の運びとなった。しかし、実際にこの合宿に参加してみると、考えていたほとんどの不安はなくなり、内容も充実した四日間となった。

合宿中の講義の内容は昔の文章に関しての講義で、全体的に自分にとってはやはり難しい内容で少々理解に苦しんだ。やはり自分の知識の量では理解するのは難解であり、もっと古典や仏教などの知識を勉強しなければならないと感じた。そのためには来年の合宿にも来るなどをして知識をつけていきたい。最後に、夏休みの間の濃厚な四日間を味わえて、本当によかったと思います。

夏休み貴重な休みが潰れたが後に残るは貴重な経験

## 歴史や文化を心で感じるという経験を得られた

（東京大学　教養　一年　豊増隆宏）

国文研の合宿には今回初参加でしたが、大変有意義な四日間となりました。熱意のこもった諸先生方のご講義や様々な行事を通じて考えるところは色々とありましたが、ここでは特に数点記させて頂きます。

講義については特に伊藤哲夫先生のお話に感銘を受けるところが多くありました。維新に際して西欧文明・思想が次々と流入し、日本の伝統・文化といったものを軽視する風潮が現れた中での、井上毅の憲法立案に対して万世一系の天皇を

戴く日本の伝統を主軸に据えた姿勢。また先生の「人を見る時はｍａｓｓでなく個人と相対さねばならない」「第二の井上毅になれ」等、心に留めて置きたい言葉が数多くありました。

また、合宿を通じて大きな収穫だったのは、日頃理屈でものごとを捉える癖のある自分が、歴史や文化を学ぶ時に頭だけでなく心で感じるという経験を得られたことです。聖徳太子や吉田松陰先生、本居宣長その他多くの人物を、人の紹介としてではなく、当人の書いた生の文章そのものを輪読という形で味わうことで、偉人達の存在、その思いが近く感じられました。

また、今回初めての短歌創作を体験させて頂きましたが、感動を素直に五七五七七のリズムに表現することの難しさと共にその楽しみの一端も味わうことが出来たように思います。こういった、自分に欠けている感性的な部分を刺激される体験をこの短い期間に多くもてたのは幸いです。

合宿中、共に学んだ皆さんや運営の方々に感謝したいと思います。有り難うございました。

合宿を通して

伊勢の地に共に過ごせし仲間等と学ぶ志（こころ）を新たにせむとす

カメラ・レポート8

野外研修・短歌創作では、伊勢神宮神楽殿で神楽を奉納し、内宮を参拝した。

## 第十一班―女子学生―

### 「価値観の共有」の素晴らしさに気がついた

（東京大学　理科一類　一年　岩瀬桂子）

この合宿を通して得られた最高のものは「聴く」ことです。合宿参加心得の「『話す』ことよりむしろ『聴く』ことに重きをおくやうに」を目にした時、私は難しいことではないという認識でしたが、最初の班別研修の時、その難しさを痛感しました。本当に「聴く」とは他人の価値観を受け入れることです。回を重ねても皆どこか殻から抜け出せていないようでした。それが短歌相互批評により劇的に変わりました。それぞれの短歌に込められた思いを聞き、班員の豊かな感性に触れることができたからです。普段は自分の感動を他人に詳しく説明したりされたりすることはありません。しかしそれにより、感動を分かち合ったり、自分にはない感性に驚かされたり、素直な感情表現に胸を打たれたり、教養の深さに感心したりしました。他者の価値観を共有する素晴らしさに私は気付かされました。そして今は、色んな人のことを「聴いて」みたいと心から思っています。

「聴く」ことの素晴らしきさま教へたまふ師と友どちのありがたきかな

### たくさんの思いあふれる日本

（九州女子大学　人間科学　二年　西山志織）

私は今回の全国学生青年合宿教室で、まず「内なる国家」というキーワードが頭に残り、この四日間考えてきました。そして、たくさんの「内なる国家」に触れたなと感じます。

樋口一葉の女性でありながらも国のために何かできないかといった深い思いがあったり、吉田松陰の国を思いながらも弟や家族に心つくしていった姿であったり。また古事記の中では、自分の思いを素直にありのままに表現する倭建命の姿であったり、倭建命のまごころに、まごころをもって応えた弟橘比売命の行為であったり。防人の歌では「父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉ぜわすれかねつる」の歌に表わされているように、子が親を親が子を思う空間であったり。本当にあふれているなと感じ、これが「内なる国家」ではないかと思いました。そして、このような思いのあふれる日本という国の内にいる私たちはとても幸せだなと感じました。

先人のまごころあふる、この国に我あることをうれしく感ず

### 歴史を学び伝え守っていく

（青山学院大学　国際政治経済　二年　河口はいりん）

去年は信貴山にひかれて行きましたが、今回は伊勢参りを兼ねて歴史を学びたいという目的でした。参加者と先生達の

熱い気概は心地よいです。

今回は、家族や友人を大切にするという気持ちが自分には欠けていたことを、吉田松陰の「私」の生き方について皆で分析した時に気がつきました。家族や友を思う心と国を思う心がどうしてつながるのか、自分の中でしっくり来ませんでした。今なら分かる気がします。

先人の道をただ辿るだけでは何も変わらない、伝統に対して過剰に執着することは未来を見据える力が不在していると考えてきました。でも辿る道、振り返った道には今と未来をつなぐ心や魂、意志という無形の生きることと直結した思想があります。歴史を学び知ることでこれらを伝え守っていく必要性と知る使命感を胸に秘めて明日に向かおうと思います。有難うございました。

うしろがみひかる、心地したれども意志をみやげに我は帰らん

## 心通じ合うことの大切さを感じた

（九州産業大学　芸術　四年　諌山仁美）

今回の合宿では、心通じる友ができたように思います。それは最初の班別研修から自分の意見を曲げることなく話せたからこそだと思います。

私はこの夏、仲間とともに臨界学校という子どもたちとのキャンプをする教育事業を必死で行いました。しかし、終わってみたら事務的なことを進めるばかりが自分の使命だと

カメラ・レポート9

別宮「風日祈宮」にて、記念撮影する女子班

思い、仲間と共につくっていくのだという心が失われていたことに気付かされました。心がつながり一体感になることは本当に大切なことです。自分一人では絶対に出来ない大きなものを生み出していくのだと思います。四日目の朝の集いで出された明治天皇の御製が大変心に残りました。「あやまちをいさめかはしてしたしむがまことの友の心なるらむ」あやまちを諌めるということは勇気がいることです。しかし、その友のためなら共同体のためなら諌めることも必要であり、それを出来るのが本当の友なのだと感じました。心を通じ合うことの大切さを改めて感じさせていただいた合宿でありました。

お互ひの意見そのまま出し合へばこころ一つになりにけるかも

## 松陰先生の弟への愛情に感動した

（明星大学　日本文化　四年　赤堀文香）

吉田松陰先生の弟敏三郎の話を聞き、そこまで深い愛情を注げるというのは何故だろうかという疑問が感動よりも先にあった。手紙一つ一つの内容よりとても深き愛を感じずにはいられなかった。その愛はどこからきているのだろうか。私は松陰先生が己の親よりとても深き愛を以て接せられ、それを、受けとり、大切にしていたからこそ己より弟敏三郎へ深き愛情を与えることができたのではないかと思った。弟敏三郎が兄より受けたものは、愛より恩へと代わり、その恩をまた周囲の人々へ愛として与えていった。そのように感ぜられ、日本人の恩は、このように昔から家族の上から下へと降りていくものと、今と変わらぬ姿であるのだということに感動した。合宿本来の意図とは違うとは思いますが、私はこの事実に大変感動しました。

目に見えぬ形なきもの胸に抱きほかほかするを内にぞ感ずる

## 他とつながっている「私」

（桐蔭横浜大学　法科大学院　岡部恵理）

私は普段法律を勉強していますが、大日本帝国憲法や現在の日本国憲法について、日頃聞けないような様々な角度からの意見を聞いて、改めて考え直すきっかけになりました。

又、「内なる国家」を感じることができました。自分の中にも確かに存在する日本人特有の美意識や感性、他人を思いやる心などは、日々の生活において軽視しがちですが、もっともっと磨いていきたいと感じました。

吉田松陰先生についての講義を聴いて、「公」と「私」という概念について班で議論した時に、吉田松陰先生にとっての「私」について目を見開かされる思いがしました。それは、他者と完全に切り離された「私」ではなく、家族や友人など周りの人々とつながった「私」ではないか、もしかしたら昔の日本人にとって他者と完全に切り離された「私」という概念自体なかったのではないか、といった班員の意見からです。

四日間、有難うございました。
〝個〟と違ひ先人の生きし〝私〟は他とつながれるものと知りにき

## 感謝の念が湧きおこってきた

（㈱寺子屋モデル　黒岩礼子）

今回の合宿は今までも特に充実していました。今回は、「会員発表」という貴重な機会を頂き、さらに女子学生班の班長を仰せつかったことでほどよい緊張感をもって臨むことができました。そして、班員の活発な意見交換のお陰で班別研修も充実したものとなり、考えや思いを深めることができました。

そして三日目の夜の慰霊祭中に、じわじわと「ありがたいなあ」という感謝の念が湧き起こってきたのです。私がこの喜びを感じることができるのは、父親からの合宿への導きのおかげであり、さらには合宿を五十三回絶やすことなく営まれてきた先輩方のおかげ、さらにさらに美しい日本を築き守ってこられた多くの先人がいらっしゃったおかげなのだと、自ずと感慨深く思われました。

「感謝」の一言に尽きる合宿でした。有難うございます。

吉田松陰と弟杉敏三郎の話を聞いて

松陰の弟思ひやる御心をまづは伝へむうりはみの子に

カメラ・レポート10

古典輪読導入講義。元富山県立富山工業高等学校教諭・岸本弘先生は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の著者である黒上正一郎先生の「太子が仏教に取り組まれたのは、この日本を何とかいい国にしたいと願はれたからであった」との文章に触れながら「我々は祖先が作ってきた歴史の集積を守って行かねばならない」と熱く述べられた。

## 国を常に意識していけるよう、心を鍛えたい

（日本青年協議会　三荻　祥）

導入講義でお聴きした、樋口一葉の御言葉に、この合宿を受ける心が整えられた。女性で、しかも若く、社会的地位がなかったにもかかわらず、日本の現状、それを取りまく世界のありさまを鋭く見つめ、時代に責任をとっていこうとされた一葉の姿には強く憧れを抱いた。

その様な心持ちで臨んだ合宿で、私が感銘を受けた人物が二人いた。本居宣長と井上毅だ。二人とも、国を背負い、日本のあるべき姿を限りなく求め表していった「一人」だ。この「一人」の存在が、如何に大きな力を生み出すものかと思うと、私もそのような「一人」になりたいとの思い、勇気が湧いてくる。

樋口一葉や本居宣長、井上毅の姿に触れ私自身も国を常に意識していける様、心を鍛えていきたい、その想いを新たにした。

もろともに学びあひたる班員と交はす言の葉日毎増えゆく
己が地へ帰りし後もなほさらに助けあひゆく友とならなむ

## 不可思議の展開を感じる

（興銀リース㈱　小柳志乃夫）

今回の合宿教室も不可思議の日程の展開を感じました。誰の心にもある「内なる国家」といふものが、宣長の真心、あるがままの素直な心とストレートにつながって、また、しらすといふ心の通じ合ふ天皇統治のあり方とつながっていく。他方、伊藤哲夫先生の一人で立つ覚悟といふことは、占部賢志さんの私の世界に心をつくした人が公の為につくすことができるといふことと表裏の関係にある、そんなことを思って過ごしました。澤部壽孫さんが以前一隅を照らすといふ話をして下さったがそこが肝心の一点と思ひます。

女子学生班の班付としては実に心もとないところがあります。今後の交流を少しでもバックアップできればと思ひます。

池松伸典次期運営委員長をもり立てていきたく思ひます。

折田豊生運営委員長始め皆様ご苦労様でした。有難うございました。

全体感想自由発表を聞いて

檀上に立てる若きら素直なる言葉に思ひを語りゆくなり
相互批評によき歌できし喜びを語る言葉を嬉しく聞きぬ
合宿も無事に終へにきこの年も新しき友らに力あたへむ

# 第二十一班―社会人―

## 子を持つ親の気持ち

（広島県警察本部　花岡伸明）

今回の合宿は私が社会人となって、また二児の父親となって初めて参加するものでした。前回平成六年の参加時と比べて自分のことと同時に子供や家内のことをも念頭に置きながら思考するようになったのが最大の相違点です。このため特に天皇陛下をはじめとする先人方の短歌を拝読する時も「子を持つ親」の気持ちが大きく影響したように思います。各講義は前回同様大変充実していましたが、特に感銘を受けたのは伊藤哲夫先生の「しらす」「うしはく」の相違についての講義と質疑応答での「正道は往々にして常に少数者である」という言葉です。帰県後は学習内容を実生活に反映し、よき社会人よき父親となれる様、修養に励みたいと思います。

家族を思ひつつ詠める

おとうさんと迎へる吾子（あこ）の笑顔見れば良き父たらむと我が身いましむ

眠りたる妻と我が子のその顔の安らかなことに我も安らぐ

妻と子の尽きぬ愛情身に受けて我（われ）は励まん日々の勤めに

## 班員の方々との会話

（㈱ビッグ・エー　犬飼健次）

今回、合宿教室に参加し三泊四日の日程を過ごす中で、何よりも素晴らしい体験だったのは、班員の方々との会話でした。もちろん講師の方々も良き思想家、教育者であり、大変多くのことを学ばせていただきましたが、社会人となり、他

班別研修。班員同士で講義の感想を心の底から語り合ふ。

写真（上）伊藤先生の講義を熱心に聴講する参加者
写真（下）班室で班員と話される伊藤先生

の職種の方々と接する機会の少なくなった今日において、警察の方、海外で働く方、会社の経営をされている方の話などを同時に聞くことなど、このような機会でなければありえません。その上、皆が深い見識としっかりとした意識を持ち積極的な意見の交換が行われていたため、班別の研修、輪読、相互批評は大変勉強になりました。それは私自身の学習意欲を刺激するものでもあり、この経験は必ずこれからの生活に生かせるものだと考えています。

慰霊祭

大神の御元に聞こゆる虫の音を古へ人はいかに詠みけむ

## 公と私

（日揮㈱　江口研治）

占部賢志先生のご講義「明治維新の光と影　吉田松陰と山尾庸三」に深い感銘を受けた。私達には個人の世界と公人の世界がある。私的な世界に心を尽くした人こそ公の為に尽くすことができる。私達は公と私の中でどの様に生きていけばよいか？。吉田松陰の私（家族への思い）とその行動の事実をひもとき明解に講義され非常に感銘を受けました。吉田松陰による思いが山尾庸三による学校設立とその発展の原動力に繋がったと思います。

一層素晴らしい事は、今上天皇の「サイエンス」への御論文「日本の科学を育てた人々」に紹介された事実です。二十一世紀は「技術立国」を指標としている日本、これらのつながりを大切にしたいと思います。

占部賢志先生の講義を聞きて

ひもといて又ひもといて求めらる師の努力にただ驚きぬ

お伊勢詣

建設を早や三十年もなりはひす御札のおかげと今度も求む

## 合宿で得た新たな發見

（元日立プラント建設㈱　日髙廣人）

江田島で初参加以來毎年合宿に参加してゐるが、毎回新たな發見と新しく教へられる點があり感銘を受けてゐる。

「内なる國家を見つめよう」と樋口一葉「塵中日記」の一節が紹介され、若き明治の女性の心意氣に觸發された。「よみがへる古事記」では「古事記」に記載された古へ人の生き様を示す「ことば」の研究に半生を捧げた本居宣長の「ものまなび」の姿勢に改めて感銘を受けた。伊藤哲夫先生の井上毅による大日本帝國憲法制定の經緯についてのお話し。岸本弘先生の「黒上先生の御本」への情熱は心に残り、何とかこの難解な「御本」に挑戦しようといふ氣持ちを新たにした。占部賢志先生の吉田松陰先生の家族愛に就いてのお話しに感動すると共に、占部先生の洞察力、探究心に感銘を受けた。

伊勢神宮内宮

朝まだき社の樹々にこだまする砂利踏む音と鳴く鶏の聲

班別研修

七十路を越えて今尚若き友に學ばさるる事の多きに驚く

## 教えを胸に生きていこうと思う

（㈱ビッグ・エー　八木澤達也）

今回初めて合宿教室に参加させて頂き、いかに私が日本の心というものを知らずに今日まで生きてきたのかということを知らされました。

小柳左門先生の歴史講義では、言とは歴史である、歴史の本質は言であると教えて頂きました。事実に基づいた現実的歴史よりも語り伝えられてきた精神的歴史の方が大切であるということに深く感銘をうけました。そして自分も語り伝えていかなければいけないと思いました。占部賢志先生の講義では吉田松陰の家族への想いについて教えて頂きました。私の世界につくすことができる人は、公の世界につくすことができる人であると聴き、自分もそうならなければならないと思いました。この教えを胸に生きていこうと思います。

第五十三回全国青年合宿教室に参加して

先達の傳へ傳へし古への心を胸に明日を励まむ

カメラ・レポート12

講義　福岡県立太宰府高等学校教諭・占部賢志先生は、これまで語られることの少なかった家族の中にある吉田松陰像を語られ、「人は個人の世界と公の世界の中で生きてゐるけれども、私の世界に心を尽した人こそ国のために尽し、公の世界で偉業を成し遂げることができる」と講義された。

## 第二十二班―社会人―

### 学問とは何かを感じさせられた

（協同組合ＡＡＡ　内田厳彦）

「学問とは何か」今回ほど深く思ひ知らされた合宿もない。小柳左門先生のご講義の佐々木信綱著の「松坂の一夜」で賀茂真淵の言葉「世の学に志す者すぐに高い処へ登らうとする弊がある故に、低いところをさへ得ることが出来ぬのである」といふ箇所および小林秀雄著「本居宣長」の中の文「自分の学問では死物は扱はない。扱ふものは人の生きた心だけである」といふ箇所は深く印象に残った。

二日目の伊藤哲夫先生のご講義と三日目の占部賢志先生のご講義も感銘深く拝聴した。吉田松陰が兄梅太郎に宛てた書簡で「夢を記す」と「加藤公に祈る」で聾唖の弟敏三郎と家族への思ひが切々と述べられてゐたのには心を打たれた。

班運営は班長の大役を仰せつかったが、班の方は合宿に前向きに真剣に取りくださる方たちばかりで、班別研修でもお互ひの思ひを率直に述べ合へて学ぶことが多かった。

もの言得ぬ弟君へ寄せ給ふ兄松陰の願ひ悲しも
私（わたくし）を尽くさればこそ松陰の偉業は成るてふ言の葉忘れじ

### 世代・職業を超えたつきあいができた

（北陸電力エネルギー科学館　戸田一郎）

今合宿は岸本弘先生に誘われて参加した。

昨年の信貴山合宿レポートを読んで、どんどん引き込まれる感動を覚えていたが、伊勢合宿も期待通りであった。

講義はどの講師にも話される態度に情熱が感じられ、知識だけでなく行動が伴う重さが感じられた。また、講義の後に行われる班別研修では、始めて会う者どうしがこれほど世代・年令を超えて話せるものかと感銘を受けた。それは班長や班付きの方の指導もあるが、やはり志を同じくする者どうしであったからかもしれない。短歌は意識を集中しないとできないが、自分の思いが三十一文字に表現できた時の嬉しさは格別であった。

国思ふ心を直（なお）に磨かなむよき師よき同志（とも）よき書（ふみ）を得て
平成の維新の志士が伊勢の地に集ひて学ぶ若人たのもし

### 日本文化に触れた四日間

（㈱はせがわ　飯山信一）

今回の研修は天皇をいただく日本人とは何か、自分自身を見つめるあっという間の四日間でした。

私が勤務する会社は仏壇仏具の販売だけでなく、日本人の豊かな心と日本文化を伝えてゆく使命があります。現在の日

本が置かれた状況・歴史を創って来られた方々の功労を講義で聞かせていただきました。また、日本最古の歴史書古事記や聖徳太子について学んだことは得がたい体験であり、短歌創作で日本の言葉の素晴らしさを実感しました。

皇大神宮参拝、慰霊祭など永遠に受け継がれてきた日本文化に触れ、家族や周りの者にも伝えていかねばならないと感じました。

今回は素晴らしい班メンバーにも恵まれ、班の共同生活の中で学ぶことが多い四日間でした。講師、事務局の皆様に感謝します。

英霊の前に額づき感謝して新たな気持ちで決意固める

## 先人達の思ひに触れ得た喜び

（㈱ビッグ・エー　小故島靖仁）

私がこの合宿で得たものは第一に先人の熱き思ひに触れ得たことです。御講義は樋口一葉に始まり、本居宣長、井上毅、吉田松陰といった先人達の残した遺文や和歌及びそれを己が事のやうに熱弁を振るひ、時には涙にうち震へながら解読して下さった先生方の御姿を通じ、自分で読むだけでは到底解らない先人の心境を感ずることができました。

歴史とは血の通ったものであり、それが脈々と受け継がれてゐるものであることを実感しました。

第二に得たものは班員の皆様との交流です。先輩方の様々

興銀リース（株）・小柳志乃夫先生は班別で行ふ短歌相互批評の際に心掛けたい注意点として、「作者に心を寄せていくことを大事にし、推し量りきれないところは作者に尋ね、文字通り心の交流を体験して下さい」と語られた。

な体験を聞かせて頂き、今後の私の宝になる貴重なお話しでした。

この合宿を通し、自分が国のためにできることは、この体験を忘れず、日常の忙しさに埋没せぬやう、目の前の仕事に真剣に取り組むことだと思ひます。

佐々木信綱著「松坂の一夜を」を読みて

いつの日か高みに登らむ先人の低きを固むるに我も倣ひて

## 日本の「まつりごと」を政治に生かす理想を持ちたい

（フリーライター　日下部晃志）

初めての合宿参加でしたが、期待以上の内容でした。何より、先ず講師の方々の気迫が凄いことが印象的でした。柔和な言葉の中にも鬼気迫る憂国の至情、友への思い、これらが涙となってほとばしる姿に私も目頭が熱くなりました。講義や班別研修を通じて「内なる国家」の深淵を少しだけですが、覗くことが出来たような気がします。

私は近い将来政治の世界に飛び込むことを志しておりますが、「内なる国家」つまり「日本の日本たる所以」、「世間虚仮唯物是真」を信じ抜く「まごころ」を欠いては政治が「まつりごと」になることはありません。

現代政治が日本の本来の「しらす」とはほど遠い状況の中で、どこまでできるか成算はありませんが、まごころを以って一隅を照らしていこうと改めて決意しています。

一隅を照らす数多の人々と結びし縁（えにし）きっと忘れじ

## 慰霊祭に感動した

（拓殖大学　国際学　聴講生　池田　潔）

初めての一人旅だったのですが、緊張の連続でした。体調が悪く、辛いことも多かったですが、慰霊祭は神秘的で豊かな経験でした。

振り向けば辛い辛いと思ひしが実りの多き旅路なりけり

## 「内なる国家」を考へ続けた四日間

（拓殖大学　日本文化研究所客員教授　山内健生）

期間中「内なる国家」とは何かを考へ続けた合宿であった。それは鎹信弘兄の導入講義によってあらためて呼びさまされた思ひがしてゐる。

「内なる国家」とは自分との一体的な把握があってこそ、事象の善し悪しを判断できるし、同時にそれに右往左往しない生き方が出来るのだと再度教へられた。

今日のわが国の最大の不幸は「内なる国家」が分からなくさせられてゐることである。党派的な立場を超えて根底にある「内なる国家」に支へられてこそ「外なる国家」はよりよきものとなる。

本合宿はこの「内なる国家」を青少年に感得させる懸命な

学びの場である。

「短歌・創作相互批評」はヤマトコトバで自分の胸中を正確に表現することの修練であり、「内なる国家」の把握と表裏している。

伊勢合宿の閉会式を前にして

平生の生くる力をあらためてそそがれし心地す学びの日々に
古き代ゆつらぬくもののわが国にありと思へば嬉しくなりぬ
太古より変はらざるもの伝はりて今に生くるがなどか嬉しき
このたびも新しきもののわが胸にわきくる覚ゆ閉会を前に

## 第二十三班―社会人―

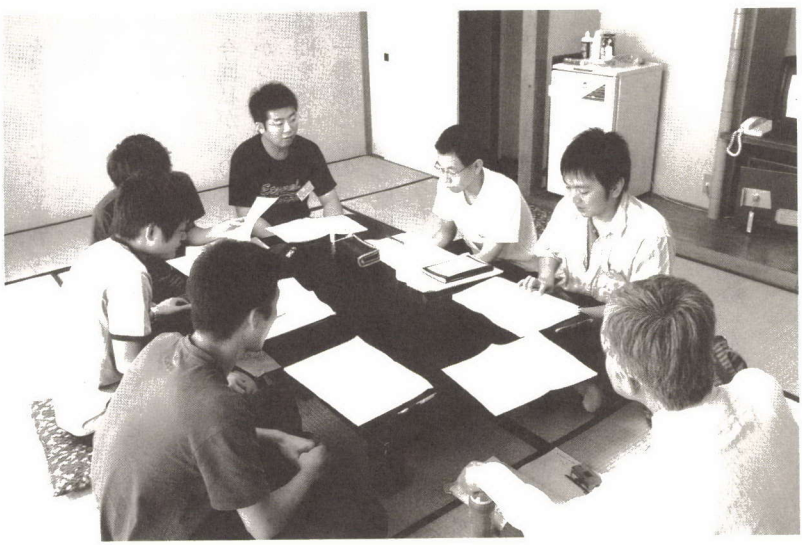
### 貴重な経験であった

（㈱ビッグ・エー　角間崎貴志）

合宿に参加して一日目、新入社員研修として参加した私にとっては、日本文学に対する興味もとぼしく、講義の内容に共感することはなかった。むしろ学生時代に私は国際交流に力を入れており、社会として国単位で考える当合宿について、強く違和感を感じていた。しかし班別研修を行う内に、徐々にではあるが、今まで自分の持ってきた気持ちこそ何か違うのではないのか、とも思うようになってきている。

この合宿というのは、学生、社会人にとって非常に貴重な

カメラ・レポート14



班別による短歌相互批評。班員の歌を一人づつ作者の気持ちを確かめながら、歌の表現をより的確になるやうに添削していく。

ものであると思う。人生のベテランと社会の若手が寝食を共にする機会というのは貴重で、その中で沢山のコミュニケーションが生まれ、合宿でしか聞くことのできないお話を沢山頂くことができた。ありがとうございました。

ベテランと若手が集ひし伊勢の地で想ひ交はり宝めぐまる

## 歴史教育の真髄を見た

（立花商事㈲　吉村明紘）

今回初めて参加させて頂きましたが、この四日間はとても有意義で素晴らしい体験が出来たと思ひます。

占部賢志先生のご講義では、今まで吉田松陰について愛国心やそれに基づいた日本への憂ひの気持ち故の行動であるといふ一つの見方しか持ってをりませんでした。しかし占部先生の着眼点はまったく別のところにあって、松陰の弟への愛といふまた違った側面を垣間見る事が出来ました。ここに歴史教育の真髄を見たやうな思ひが致しました。偉人一人一人のストーリーを掘り下げていく事がこんなにも楽しいものかと感激した次第です。

また内宮で御神楽を拝観して、あの何とも言ひ難い厳かな雰囲気と雅楽の音・舞は本当に鳥肌が立つほどの感動をおぼえました。今回伊勢を詣でる事が出来て、これで晴れて本当の意味で「日本人」になれたのでないかといふ気持ちです。

夜更けて熱きおもひを語らんと友につくししまことごころを
ますらをのみ魂鎮めし若きらのおもひとどけとただ祈るなり
今は亡きいもうとに贈る
をさなき日に我を慕ひて笑む妹に心づくしの祈りを込めつつ

## 日本人のルーツを知ることにヒントが

（博多高等学校　村山篤生）

今回私がこの合宿に参加した動機は「自分探しの旅」をしたかったからです。教師として教鞭をとっていますが数々の疑問を感じながら職務を行っています。

一番感じるのは子供達の「活力」の無さです。無気力な毎日を重ねている原因は何だろうか、いつからこうなってしまったのか。どうもその分岐点が終戦にあるのではないかと思います。言うなれば、本当の教育は戦後からであり、それより以前は間違いであったという風潮が多々あると思われます。しかし高度経済成長を支えた世代は戦前の教育を受けた「教育勅語」組です。この世代の活力が生み出した功績です。

「活力」を持った人材の育成のためには、我々日本人のルーツや魂を知ることにヒントがあるのではと、この合宿で感じました。

迷ひありて鞄一つで来し伊勢に希望の灯火みつけたりけり

## 講師の篤き思いに打たれた

（無職　近藤良捷）

日本の心を探し、見つめ、伝えてゆくべしとの気迫が十分に伝わってきました。

諸外国にも諸外国なりのその国の文化・伝統・精神を守り伝えてゆこうとの運動が当然あります。今後は日本主義に陥らずに、比較文化論の点からも他国例えば「ドイツ人とドイツ人の心」をもまじえた学習会になさってはいかがでしょうか。初めて参加した私には、貴会が「独善・教条・国粋」に傾く感を受け、その方位への反対の重しとして活用してみて下さい。

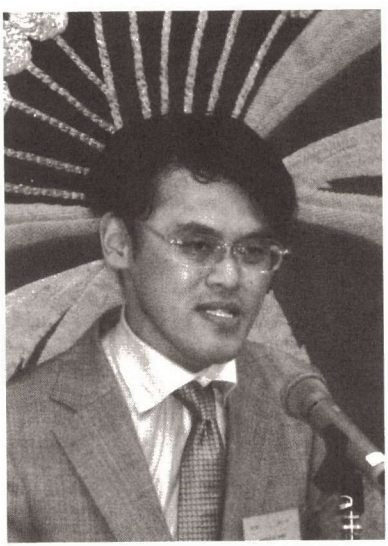
講師らの篤き思ひに打たれては我も行くらむか老に鞭当てつ

## 若い人達が頼もしい

（㈱バントレーディング　森重忠正）

前回の伊勢合宿から今回で三回連続になります。先生方の御講義には毎回新しい発見があり、感銘を受けるのは勿論ですが、それを自分自身の実生活に生かしていないことを痛感させられました。この一年間、自分として何の勉強をしてきたのだろうかと恥しくなります。班別討論で皆と話していてそれがよく解りました。今後は理屈に走らぬようもっと人の話に耳を傾けるように注意します。





会員発表。㈱寺子屋モデル講師・黒岩礼子氏（写真右）は、不登校の児童生徒の自立をサポートする活動を具体的に活き活きと語り、藤村酒造㈱・藤村孝信氏は家業における「酒造り」に取り組む困難と喜びを確信をもって語られた。

最後の全体発表の時に若い人達が目をかがやかせながら合宿の体験を語ってゆく姿が印象的であり、頼もしく思った次第です。

班別研修で
教育の荒れたるさまをせつせつと語るみ友のまなざしするどし
日の本の美しきこと英雄の生きざまなども教へぬ現場と
水がれのいすずの川もこの朝は流れゆたかに白波もたつ

## 一期一会

（山口県立熊毛南高校　寳邊矢太郎）

一　明るく元気な社会人班で、皆さん思ふ所を飾らず述べてくれ、大変清々しい気持ちです。有難うございました。

一　小柳左門さんの御講義の展開には眼を瞠らされました。「松阪の一夜」、一期一会の機縁で生涯が定まるといふ感激、求める志の激しさあったればこそですが、ふかく感じ入りました。古事記に親しむことを続けて参りたいと思ひました。音読も大事ですね。

一　一人の真正の日本人出でよ、と念じつつ、明日は来合宿への元旦と致します。

一　二十三班の皆さん、又来年お会ひしたいものです。この一年お付き合ひ下さい。

折田豊生運営委員長を
にこやかのゑまひにひかれこのひととせ我ら運営委員ふんばる
先輩の指揮とるすがたまことしもますらをぶりといふべかりける

# 第二十四班―社会人―

## 大変貴重な講義だった

（㈳福岡県中小企業経営者協会　田中隆一）

まずは講義をされた先生方の熱い思いと、この合宿ために準備された研究と分析の労に感謝致します。それぞれの講義内容が一つの大きなテーマとなって一貫しており、五十三回という時間の積み重ねと引き継がれてきた精神の強固さを感じずにはいられませんでした。

「誰の心にもある『内なる国家』を見つめよう」と題された導入講義では樋口一葉の日記の抜粋が紹介されましたが、明治期の青年の志の高さが現れた知的能力と人生観に驚きを禁じ得ないものでした。また、歴史講義「よみがへる古事記」はなんとすばらしい講義であったことか。感銘と驚嘆に学ぶということの真理を得た大変貴重な講義でした。全編に流れる先人の偉大さと国家観を知るにつけ、自らの軸足を見出し、旅のしおりを得た思いの四日間でした。

運営に携わられた方々に心からお礼を申し上げます。深謝。

英霊に捧ぐる和歌（うた）の朗詠に心奮（ふる）はし平和を思ひぬ

## 自分自身が変わった

（㈱ビッグ・エー　越田　肇）

私は、この三泊四日で自分自身が大きく変わったと自覚しております。素晴らしい先生方の講義、とりわけ小柳左門先生の「よみがへる古事記」の中で、本居宣長に岡部衛士が示した、学を志す者はその低きところを疎かにしがちですぐに高いところを目指そうとする、だから低いところさえ到達もしないのだ。低いところをしっかり固めることが大切であるという教えに己を重ね合わせ、自分もすぐに結果を求めていないだろうか、また、本当に基礎ができているだろうかと反省しました。短歌の創作も苦心致しました。見栄えのよい言葉で飾った歌よりも稚拙でも心の感動を素直に詠んだ歌の方が読み手の心に響くということも学びました。そして何よりの宝はこの合宿で出会った師であり仲間であります。班別研修では己の勉強不足も痛感いたしましたが、短い期間の中でも心通わせ、刺激を受けることができたことこそ何よりの宝であると今思います。

合宿最終日において

合宿（つどひ）にて出会ひし友と別るれど日々に学びて己（おの）を磨きたし

カメラ・レポート16

三日目夜。慰霊祭に先立ち、元新潟工科大学教授・大岡弘理事から、慰霊祭の趣旨と祭儀の手順が懇切丁寧に説明された。

## 伊勢での出会いに感謝

（さわらび画廊　田中壽幸）

はじめて伊勢に参りました。土曜日と日曜日の早朝、内宮までの道を歩きました。土曜日は雨も一時強く降り、ほとんど人影を見かけませんでした。いにしえの森は静かに清らかに、そして深い畏怖に満ちていました。社殿は簡素の美そのままに、我が国の一番大切な「かたち」を伝えていました。

ここには全部ある……、そう思う自分がいました。福田恆存氏は、自然と歴史と言葉とは最高の師だと云いました。ここには全部ある、そう感じました。

そして、ここに集まった仲間達は、真に受け継ぐべきものを受け継いでいく人達であり、その強さを持った人達なのだと思っています。

日本を思い、そして伊勢での出会いに心から感謝いたします。

遠白く連なる山に悠かなる御國の史を思ひ起こしぬ

## 世代を超えたコミュニケーションがあった

（村式㈱　住吉　優）

諸先生方のご講義と班別輪読・研修を通じて感じたのは、古典や和歌を読み解くことの楽しさである。難しい文でも繰り返し繰り返し読み、また輪読することで朧気ながらも意味がとれてくる。そして文に込められた先人の心を感じることができる。そこには心が震えるような感動があり、合宿生活を進めていくにつれて、その作業が楽しみになっていく自分がいた。それは先人との心のコミュニケーションが取れたからだと思う。班での研修でも感じたことだが、世代や立場を超えた真心での交流は大変心地よかった。現在インターネットなどを通じて同世代による横のコミュニケーションは盛んに行われているが、何か物足りなく感じるのは、今回の合宿で行われたような世代を超えた縦のコミュニケーションが足りないからに違いないとWEBサービス制作会社の職業柄か、感じた次第である。

仕事（WEB制作業）のことを考へて
先人の心を感ずる楽しさを情報技術でいかに伝へん

## 円滑な合宿運営だった

（防衛省航空幕僚監部　神谷正一）

今年もまた伊勢での合宿に参加できたことを嬉しく思ひます。ただ、若干学生の参加者が少なく、自ら勧誘できなかった反省も含めて残念に思ひました。

ご講義は、鎹先生の導入講義から全体を通じて一貫したものが感じられ理解しやすかったものと思ひます。班別研修での班員各位からの意見を聞いても、大事なところはしっかり摑めてゐるなといふ印象です。輪読箇所は昨年に比して難解

でした。日頃の浅学に試練を与へられてゐるやうな気がしました。

運営については、すこぶる順調に感じられました。事務局等の人数が例年に比して若干少なく、大変な状況とも聞きましたが、障りを感じる所は無かったやうに思ひます。

委員長始め運営に携はられた皆さん、お疲れ様でした。有難うございました。

この年も集ひ来たりし班員（みとも）らと学び語らひ得たるはうれしき
各の生業齢（なりはひよはひ）は違（たが）へども心打ちとけ語り合ひたり
日常に戻りて後も折々に学びゆきたしと言ひし班員（とも）らは

## 国の問題を考へてをられる方がをられた

（福岡県立香住丘高校　酒村聰一郎）

今回は社会人班の班付きをさせて戴いた。社会人班は班員としてもこれまでに経験が無く、種々の職業に就かれてゐる方々と親しくお付き合ひが出来、大変有意義な時間を過ごすことが出来た。心から感謝申し上げたい。

皆さんそれぞれの社会生活の中で、日本の国のあり方即ち日本文化や安全保障、教育問題、歴史教育さらに政治問題化している「靖国参拝」問題等々、深く憂慮され、高い見識をもって考へ続けてをられることにこちらの方が大いに啓発させられる思ひであった。

班員の中には合宿教室のパンフレットを見て一人で参加さ

合宿最後の夜を迎へ、講義室の壇上に祭壇を設け、祖国日本のために尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊をお迎へして厳かに慰霊祭が営まれた。

れた方もをられ、全国には国の問題について高い意識をもって考へてをられる方がをられることを改めて認識した。

今回の合宿教室で班員の方々と講義をはじめ様々の体験を共有できたので、今後ともこちらの方から情報を発信し、交流を深めてゆきたいと念じてゐる。

太子の御本の輪読

師の君の説かる、太子のみ教へを班員らとともに読みゆくかしこさ

聖王を仰ぎて読まれし師の君の言の葉たどりてみ心偲ぶも

## 第二十五班―社会人―

### 「言葉」がいかに大切かという事がわかった

（村式㈱　中川　尚）

講義や班別研修、全体を通じて感じたのは、「言葉」がいかに大切かということでした。日本人の心を表現できる唯一の言葉はやまと言葉であり、また、究極の姿が和歌なのではないかと思いました。

神代から続く日本の文化、すなわち日本の心はその時その時代の言葉によって伝えられてきました。この言葉が守られているからこそ現代の私たちも千年、二千年前の人々の心に直に触れる事ができるのです。こんなにも素晴らしい体験が出来るのはこの言葉を守り伝えてきた先人達のおかげに他なりません。今を生きる私たちは、これを後世に伝える義務があると強く感じました。

言の葉に込めて守らる日の本の心伝はれ千年先も

合宿をはなれて里に戻るとも共に学べる友あるはうれし

### 古き良き文化に触れて優しい気持ちになりたい

（日商保険コンサルティング㈱　川本　剛）

今回私が合宿に参加したのは、学生時代からゴミ拾い活動を行う団体（ＮＰＯ法人）に参加しており、古き良き時代の日本を守りたいという気持ちがあったからです。環境を守り、現在を守り、未来を守り、そして歴史の教えを守るということはいつの時代にも大切なことだと思います。愛する人を大切にすることが出来れば、自然と自分の国を愛する事が出来ると伊勢の地で確信することが出来ました。これからもっと古き良き文化に触れて優しい気持ちになれたらと思います。

古き良き文化に触れて考へる愛しきものは皆助け合ひ

### 先人の思いを大切にしていきたい

（㈳福岡県中小企業経営者協会　永嶌幸平）

合宿で特に印象深く感じたのは、「家族を思いやる気持ち（私）があるからこそ、国の大事（公）を動かしていける」という占部先生のご講義です。現在企業人であり、家庭を持

つ私にとって大変考えさせられるものでした。

合宿を終えて今私が思うことは、この合宿に参加して私の心の中に確実に「国の将来を思って亡くなられて行った先人の方の気持ちを大事にする思い」が育まれているという事実です。言い換えれば、日本人として自分の背中に一本の芯が通ったような気持ちです。また、先人達の思いを周囲に伝えて行く事は私たちの義務であると思いました。

お盆休みに甲子園で高校野球を観戦して

幾日か過ぎ去りようと忘れまじ灼熱の空と球児の勇姿

## 短歌の奥深さを味わうことができた

（㈱ビッグ・エー　小島一嘉）

合宿に参加する前は短歌を創作したこともほとんどなく、古典もほとんど勉強をしたことがなく不安でした。しかし、合宿教室に参加し、班の皆様の温かいご指導や、先生方の講義を通してとても親しみを覚えました。

短歌を創作する際に自分の感じた思いを素直に詠むのはなかなか苦労しましたが、短歌を創作してみて初めて短歌の奥の深さを味わう事が出来ました。これらの経験をこれからも活かせていければと思います。

合宿で切磋琢磨し学びしは心に染みいる大和の心

『合宿を顧みて』。初めに登壇した元・日商岩井（株）・澤部壽孫副理事長は、樋口一葉の和歌や防人の歌を挙げながら「名も無き先人がどのやうな心持ちで国家を守ってきたかを感じ取ってほしい、また今に残る多くの歌や文章から先祖の真心を感じたと思ふが、さう感じた心を今後も大切に育んで行って欲しい」と呼び掛けた。

## 先人の思いが立体となって迫って来た

（あずさ監査法人　牧　美喜男）

「短歌のすすめ」を読み、短歌が感動のほとばしりである事が納得出来た。そして今まで知識でしかなかった御製等の和歌を心から味わう事が出来た。先人の心の動き、感動、思いが単なる平面であったものが立体となって迫って来た。

自分は歴史が大好きだが、単なる年表的知識が多い事を感じた。吉田松陰先生の功績は知っていても先生のご本は読んだ事がない。本居宣長先生が精魂傾けた古事記、聖徳太子の研究書も是非呼んで見たいと思う。この合宿に参加し、まさに樋口一葉の「なすべき道、訪ねる場所」を教えて頂いたと思います。

いざ励まむ伊勢での学び生かしつつ日の本興す若人づくり

## この合宿を更にＰＲしていきたい

（ＩＭＳグループ本部　総合企画部　最知浩一）

二年ぶりの社会人班の班長を仰せつかり少し不安であつたが、班員の諸兄、班付の稲田先生のサポートもあり何とか四日間乗り切れたと言ふのが率直な気持ちです。初日の鎹先輩の導入講義に始まり、三日目の占部先生の歴史講義まで、一貫したテーマで、班別討論、班別輪読はとても有意義で、班員も色々な思ひを披瀝してくれました。全員が初めての参加で、特に短歌創作を不安視してゐましたが、相互批評を通して少しづつ自分の感動や思ひが整へられ、自分の感動を素直に歌に表現して、全員でその歌を味はふ事が出来ました。自分の思ひや感動を正確に歌に詠むことが、また、相手の思ひを素直に受け止めることが如何に大事か班員諸兄から改めて教へていただきました。

年々参加学生も少なく、かつて大勢が参加した合宿を体験した者には寂しさは禁じえませんが、この合宿の存在と素晴らしさをより多くの学生にＰＲしていきたいと思つてゐます。若手会員や学生の意見を聞き、早速着手したいと思ひます。

合宿開始前、長男と初めて伊勢神宮を参拝して

さはやかな木立の中をあゆみゆき五十鈴の宮を吾子と詣でる

緑濃き五十鈴の宮を吾子連れて参拝するは何とうれしき

まつすぐに雄々しく立てる内宮の木々のごとくに育て吾が子よ

## 短歌相互批評は人生修業の場

（ＮＰＯ法人教育オンブズマン　稲田　健二）

国文研で育った若い方々が日頃の精進の結果を存分に発揮出来た合宿であった、と感じました。また、班付きの役目を仰せつかったせいもあって短歌の相互批評は、人生修行の場だなと改めて実感しました。その心は、見栄も気取りもそして恥らいも捨てて裸になった心と心を通わすことが必要だということであります。殊に戦後そして今日の社会風潮の中で

生きている多くの人達に是非体験してもらいたいものですね。

八月二十三日

川床を見せたる五十鈴も神宮の森も潤ふ今日のひと雨

八月二十四日

川底を見せて水なき五十鈴川恵の雨で水戻り来る

## 第二十六班―社会人―

### 袖すり逢ふも多生の縁

（福岡県立直方高校教諭　小野吉宣）

（班長として）

社会人班であるので最初の班別討論では私が司会をした。次から班員に一人が一回司会を経験して貰うことにした。前もってそれ程の打ち合わせは出来なかったが、皆、班全体のために一所懸命に勤めてくれたことを感謝したい。同じ部屋で寝て一緒に風呂に入り、三度の食事をしたのである。「袖すり逢ふも多生の縁」と昔から言はれてゐるが、合宿で同班となった班員との深い縁（えにし）を大切にしたい。班付の小田村学兄もずっとあのにこやかなゑみを絶やさず班員の心を開くべくサポートをしてくれた。感謝してゐる。

（勧誘について）

九州工大から二人しか参加しなかった。毎週毎週一回も欠か

「合宿を顧みて」。折田豊生合宿運営委員長は「多くの講義から、先人が我々に託した様々な課題に気づいたと思ふ。ここで学んだ多くの仲間とともに、切磋琢磨しながら、一つ一つの課題を解決して行かう」と訴へた。

さず物心両面からサポートしアドヴァイスしてきたのにこの結果である。だが少しもメゲてはゐない。鷲頭・谷口両君を中心に他の六人の学生を来年の合宿参加者となるやうに至誠通天の穏やかな気持ちで指導を行なふ。

今朝、九州工大の谷口君が明治天皇の御製

あやまちをいさめかはしてしたしむがまことの友の心なるらむ

を紹介した。そこで鷲頭君に対して自分が「まことの友」たり得てゐるか、厳しく己に問ひかけながら日々を過ごしてきたと言ふ内心を表白してくれた。その姿勢に僕は学んだ。

無意識に師はどこにぞと探しをり我に返りて寂しくなるも

若きより学びの親と慕ひ来し師に見守らる思ひ湧き来る

## これからの日本を背負って行く

（石塚工務店　石塚琢磨）

この合宿に来て先ず、日本のことを思う同じ世代の方々が、これだけ集まったという事に感動しました。「国歌　君が代」を大声で歌った時には体の裡から何か込み上げる物を感じました。

今の学校教育では、身に付けることが出来ない正しい国家観、歴史観をこういった場で学べるということはとても素晴しい事だと思いました。皆さんとても勉強されていて、自分の勉強の足りなさに気付かされ、これからの日本を背負っていくためにもそういった勉強をもっともっとやって行かねばならないと感じました。

私は、十月から宮大工として宇治橋の掛け替えに加わりますが、日本人として日本がどういう国なのか、どういう風に素晴しいのか誇りを持って話せる人物に成長したいと思います。

慰霊祭にて

英霊の御霊招きし斎庭にて感謝の思ひ湧きてやまざり

同志らの国への思ひ仰ぎ見るまだまだ足りぬ我が愛国心

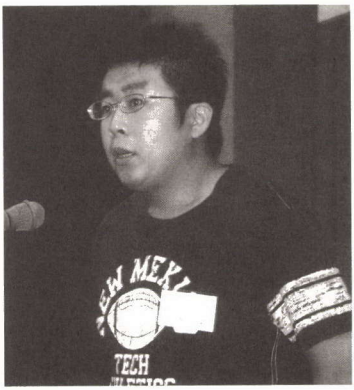
堂々と歴史を語る方を見てそれにならむと思ひかためる

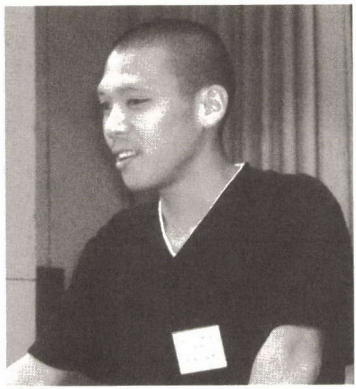
## 弟思いの松陰はすごい

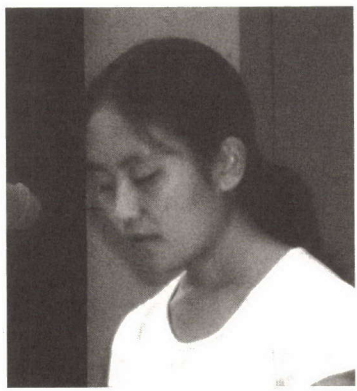
（㈱ビッグ・エー　林　和久）

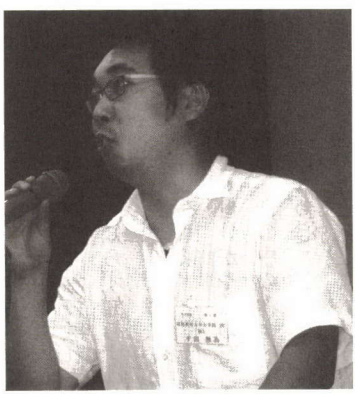
私は、今回初めて全国学生青年合宿教室に参加しました。今まで学んだ事のなかった事づくしであり、今後の人生に生かして行ければと思う話ばかりでした。

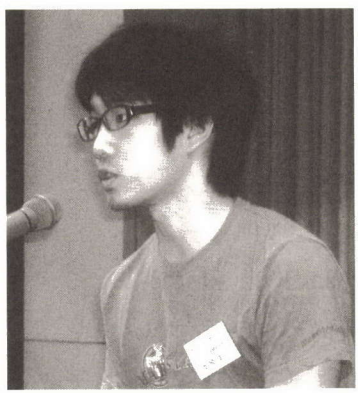
特にこの合宿で一番心を打たれたのが占部先生の「明治維新の光と影――吉田松陰と山尾庸三」という講義でした。私は吉田松陰という方の名前は聞いた事があったのですが、どういう事をした方であるかを知りませんでした。今回松陰という方は非常に家族思いで、弟が耳に障害があり話が出来ないので、その弟のためにペリーの船に乗り込んでまでしてアメリカに勉強しに行こうと考えたところがすごいと思いまし









全体感想自由発表。学生から社会人まで、自分の正直な言葉で「伊藤哲夫先生に『平成の井上毅になれ！』と言はれ、目の醒める思ひがした」「吉田松陰の弟を思ふ気持ちの深さに心打たれた」「天皇の御歌は知識としては持ってゐたが、心に迫って感じられた」「一人で頑張るのではなく、皆と心を一つにすることが大事だと思った」などの感想が次々と壇上で述べられた。

た。

今思ふ合宿に来て学ぶこと至らぬ我の常日頃悔ゆ

## 創業者も維新の志士に匹敵

（日本植生㈱　宇祢　洋志）

今回はこのようなすばらしい合宿に参加させて頂きまことに有難う御座います。今回の合宿で特に心に残った事は弊社の創業者である故・柴田正の心を偲ぶことが出来たことです。

創業者も維新の志士同様、終戦後の荒廃した日本を復興していかなければならない使命感に燃えており、弊社を創業しました。国全体が食料不足で食糧政策を行なっている時に、国土の復興のため杉や檜の苗を育て日本の国土の復活を考えていました。

私は今まで、創業者の気持ちは人づてに聞いて、何となく理解しておりましたが、今回の合宿に参加して、多くの方と対話し、又素晴しい講義を聞いていく中でより深く理解することが出来ました。今後はこの気持ちを後輩達に伝えて行きたいです。

志持ちて業行（なりはひ）なはむ自我の強さを常に省み

## 論語読みの論語知らずになっていた

（㈱はせがわ　土岐英敏）

先ずは今度の合宿研修に関わられました全ての方々に御礼申し上げます。有難う御座いました。

仕事柄、日本の歴史や日本人の信仰心などに付きましては勉強し、日頃の業務の中でそれを活かしているつもりではありますが、講師の方々の気概、熱意に触れまだまだ不十分であると痛感させられました。知らず知らずのうちに「論語読みの論語知らず」になっていたのではないかと思います。

今回の主題である「内なる国家」を再度自分自身の中で整理・構築し、他人ではなく自分がやるのだとの認識のもと、神仏を尊び、先祖を敬い、世の中の物すべてに感謝する日本人が本来持っている「日本の心」というものをきちんと相続した上で伝承して行きたいと考えています。

研修を受けてぞ思ふ「論語読みの論語知らず」になりてはならぬと

## 年代が違う班員が心を一つにして学べた

（都市防犯研究センター　小田村初男）

鎹先生の「内なる国家を見つめよう」との導入講義に始まり、特にその中で「日本は守るに値するか」との問題提起があった。続く小柳左門先生、伊藤哲夫先生、占部先生の心の籠った講義で、此の日本を作り、守り、育て、受け継いできた人々がどのやうにしてきたか、正に心に染み入るやうに気付かされた。特に松坂の一夜で本居宣長が賀茂真淵の志を継ぎ生涯を掛けて「古事記」を解き明かしていった故事に触れ

ると、三井甲之先生の

ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

の御歌の如く、まさに積み重ね積み重ね受け継いできた日本の国柄を感じた。

また班別の勉強に於ても年代の違ふ班員が心を一つにして学んでいくことができたと思ふ。

講義で日本武尊のお話を聞いた後に

伊勢神宮にお参りして

いにしへに若き日の皇子の詣でられし時と変らぬ神の宮はも

## 第二十七班―社会人―

### 知らないことに気付けた合宿

（㈱日本植生グループ本社　大月博史）

合宿では、今まで考えもしなかったことをたくさん知るきっかけとなり、同時に考えていなかった自分が恥ずかしくなりました。

特に、歴史を学ぶという事は、その当時の時代背景や、作者や人物の心情まで推し量って、何故そうした行動をとったのかを感じ取ることだと気付きました。先人一人一人が問題意識と志を持って、国家のことを想い、時には憂う姿を知っ

閉会式。主催者を代表して今林賢郁副理事長は「次代を担ふ若い諸君に志が繋がればこの国が揺らぐことは無い。その一念で、五十三年間、合宿教室は続けられて来た。我々も今のこの時代において、国のことに思ひを馳せて考へる仲間でありたい。」と一人びとりが国を支へる志を持って生きて行くことの大切さを説いた。

たとき、自分もそう生きたいと思いました。
私は今回、班員に恵まれたと思っています。班員と共に過ごし、話しを深めたことが私の気づきに繋がったからです。
まだ整理の付いていない部分もたくさんあるので、これからの日常生活の中で深めていきたいと思います。

伊勢の地で共に学びし友達と短き時間は終はりけるかな

## 日本人の考え方や歴史を守っていきたい

（㈱ビッグ・エー　福田　透）

上司から「お店にばかりいないで旅行気分で行っておいで」と言われて参加しましたが、思っているほど甘くはありませんでした。特に、歳が十～四十歳離れた方々（編者注、福田氏は十八歳です）と同じ部屋で四日も過ごすことと、講義や班別研修で、自分が苦手とする日本の歴史や人物などがたくさん出てきたことには、大変とまどいました。
しかし、合宿を通して、知らなかったこと、知っていかねばならないことに気付けましたし、班別研修では、自分のとらえ方と相手のとらえ方に違いがあることも分かりました。
仕事をしながらも、更に学びを続け、先人が守ってきた日本の考えや歴史を守っていきたいです。

講義を聞いて
師の言葉の熱気にふれて日本の歴史の知識の足らざるを知る

## 自分の軸となるものを持ちたい

（日本植生㈱　田邨研二）

社会人となり数年経つにもかかわらず、自国のこと、社会情勢にうとく、合宿当初は何が行われているのか全く理解ができず、混乱状態が続きました。なぜ参加者が訳の分からない話をしているのか、なぜ自分がそのことに意見を求められているのか・・・次第に、自分自身が日本の過去や未来について考えてこなかったことに気付かされました。また、自分の生い立ちやこれからの人生についても考えることがなかった。目先の事ばかりにとらわれて、もっと大切なことがあることに考えが及ばず、考える材料も無かったことが悔やまれます。
過去の歴史に学び、自分の中に軸となるものを持てるよう、今日から気持ちを新たに生活していこうと思います。

最終日雨がやみ日が射して
晴れ空の光がしみて呼びさますまなびの心気持ちあらたに

## 次回も参加したい

（無職　大森和弘）

年齢差三十八歳もある班の皆さんと共同生活し、短歌相互批評の時間はとても素晴らしかったです。これからの人生へのとても良い経験となりました。

歴史を学ぶに際し、そこに登場した個人の人生観を教えていただくと、歴史はドラマなのだと良く理解できました。カリキュラムは密度が濃く、充分に吸収できたかどうか不安はありますが、思い出の中に永く残り、くりかえし自問自答していけると確信しています。

次回も参加させていただけることを希望します。本当に有り難うございました。

合宿は終はり来るとは知りつつもむかへる気持ちさみしいことよ

## 「内なる軸」を太く身につけたい

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

十八歳～五十代後半という年齢差を抱えた二十七班は、大変充実した合宿を過ごせたと思う。班別研修で「今まで考えても見なかった」事に気付けたという意見が多かったからである。班別研修で、「今の時代は何でも自己責任で自由に選択できるから、昔は良くて今は駄目という考えはいかがなものか」との意見が出た。しかし、選択する自分自身がどういう判断基準を持っているか曖昧な現在、自分の軸をどこに据えるのかが必要なのだと改めて気付いた。導入講義で鎹先生が語られた「内なる国家」も、自分のより所となる思想に行き着くのではないかと感じた。更に学びを深め、自分の軸を更に太くしていきたい。

我が内のゆるがぬ軸を持つべしと気付かされけりこの教室で

杏林大学四年・松井宏太君が閉会にあたり参加学生を代表して「今回の合宿で新しく友ができ、これからますます友情を深めていきたい」と抱負を語った。

## 松陰先生の新たな志士像に感動

（鳥栖市役所　西山八郎）

これまでの知識では解決できない大きな課題に立ち向かい、悩み、何とか自分の思いを言葉に表そうとされている班の皆さんの姿を見て、自分自身がそうであったときのことを思い出しました。すぐに光が見える事ではないですが、目をそらさず一つずつ向き合っていきたいと思います。

占部先生のご講義では、松陰先生が、弟敏三郎に注ぐ暖かい心遣いに触れ、これまで抱いていた志士像に新たな視点を示された想いが致しました。「私の世界に心を尽くした人こそ公の為に偉業を成し遂げる事ができる」とのお言葉に感銘を受けた次第です。

宇治橋より

花のくづ浮かべて神の五十鈴川と詠みたる父の姿浮かび来

水枯れてさびしけれども水遊びに興ずる子らを見ればうれしき

# 第二十八班―社会人―

## 「まことの道」に一歩一歩でも近づこう

（神奈川県職員　中村正和）

憂国の情息（や）み難きものがあり、縁を頂き、今回初めて合宿に参加させて頂きました。まず、この合宿で諸先生の魂魄をゆるがす御講義から多くのことを学ぶことができました。篤く御礼申し上げます。また、自分の「内なる心の在り方」に気づき、根本的な反省ができたことが大きな収穫でした。国文研の皆様に深く感謝致します。私は十八歳の時に読んだ三島由紀夫先生を起点として以後三十数年、独学で日本の文化・歴史・伝統を探求し、日本人の心を求めて自分なりに生きて来たつもりでした。しかし、この国文研の合宿とりわけ班別研修と和歌の創作において班の方々と語り合うことによって「誠に生きる」ことの難しさを改めて痛切に感じたのでした。やはりまだ自分は知識と観念の中に居る。本当の「まこと」を生きていないのだという現実を痛切に突きつけられてのです。「まことの心」は言葉では説明できない。心で偽らずに真実に感じるしかない。そして「まことの心」を感じ生きる為には、日々の人と物と事に対する己の心の在り方こそが問題なのだということです。「足下を見る」この大切な原点から日本人として「まことの道」に一歩一歩でも近づこうと決意を新たに致しました。班の皆々様ありがとうございました。

敷島のやまとの道をたづねんと伊勢の集ひに馳せ参じけり

## 美しき日本の言葉を学び、子供達へ継承したい

（㈱はせがわ　齊藤徳雄）

今回の全国学生青年合宿教室の運営におかれましては、関係各位のご尽力に感謝申しあげるとともに、五十三回もの長きに渡り本会の発足の主旨を貫かれた諸先輩の皆様に対し敬服致します。弊社会長長谷川裕一の勧めにより多少の先入観を抱きながら参加いたしましたが、講義をお聞きする程にそれは払拭され、むしろ日頃弊社内において経営理念としているものと一致するものとして心より共感致しました。明治維新を期に、聖徳太子の時代から日本人の精神文化の中心とされてきた神と佛を共に敬うことを妨げられ、更には先の大戦の責任までもがその宗教観に起因するかのごとく、公の場から排除させられることになった現在、その反動はこの国の未来の姿さえ危ういものとさえ感じられます。これを機に、改めて日本の心を再認識し、啓蒙・育成を目指したいと感じております。そのためにも短歌を通じて美しき日本の言葉を学び、子供達へと継承して参りたいと思いました。鎹先生をはじめ二十八班の皆様本当にありがとうございました。

五十鈴川流るる水は濁れども満ちたるさまは更に美し

## 我が子にこの合宿で学び得たものと出会ひを伝へたい

（㈳福岡県中小企業経営者協会　光武健司）

今回、本合宿教室へ参加した直接のきっかけは、現在の勤務先である㈳福岡県中小企業経営者協会の新人職員研修の一つとして参加するといふ、いはば受身なものであつたが、折角の機会だから楽しんで学ばう、そしてその中で何か一つでも我が子に伝へるものを持ち帰らうと思ひ、合宿に臨んだ。そして今、合宿を終へて、いかに多くを得ることが出来たかに驚いてゐる。まづ、鎹先生の導入講義で先達の心に触れ、自らの中にある「日本」といふものについて見つめ直すきつかけを頂いた。小柳先生には古事記と本居宣長の熱意を通して、「心をもつた歴史」を知ることの大切さを学んだ。伊藤先生には井上毅の「シロシメル」の言葉による一人一人の自立と君民一体の心をもち相互の信頼の中で育まれた日本の底力を垣間見た気がする。そして私が最も心に残つたのは占部先生の御講義である。松陰とその弟を通して公私を問はず「至誠」を貫く生き様に思はず心が熱くなつた。そして、何より全体を通して共に学んだ班員から多くを気付かされ、教へられた。古典輪読や各講義の後の班別研修で様々な考へを聞くことでより理解を深めることが出来た。「人の成長は出会ひが創る」私が本合宿で得たものの中で最も大きなものはこの出会ひであつた。郷で待つ我が子にこの合宿で学び得たものと出会ひを伝へたいと改めて思ふ。末筆ながらこの合宿へ関はつた全ての人に感謝申し上げます。

伊勢の地で学びしことこの出会ひ生ひ立つ吾子に伝へゆきたし

同信の友との別れ惜しけれど我待つ吾子の笑顔恋しや

## 班別研修を通していかに物事を知らないかを知った

（㈱ビッグ・エー　増田光宏）

私は会社の新人社員研修の一環としてこの合宿に参加させて頂きました。配布された合宿の案内プリントを見て正直行きたくないという気持ちで一杯でした。見ず知らずの方達と三泊四日を過ごし、短歌も創らなくてはならないということなので辛い日々が続くことを覚悟して来ました。合宿での全日程を終えての感想は私にとってはやはり辛いものでした。一番苦しかったことは各講義の先生方の話についていけなくて理解できなかったことです。しかし、班別研修で班の方達と講義の内容を確認し合うことで、私にもおおまかな流れを理解することができました。班別研修を通して班の方達と話すことで、皆さんはいろいろな事を良く知っているなと思うと同時に私がいかに物事を知らないかということを思い知らされました。この合宿の経験を私のこれからの人生に活かしていきたいと思います。

合宿で仲間と共に学ぶ日々心に留め気持ち新たにす

## 自分の内にある感動を積み重ねること

（アサヒ飲料㈱　澤部和道）

本合宿では、全ての講義に於いて「内なる国家を見つめよう」といふ問題提起が底流に流れてゐた。

その中で、小柳左門先生が「自分の楽しかったこと、嬉しかったこと、それこそが自分の歴史というものではないですか」と言はれた言葉が大変印象に残つた。まさに、目を見開かされた思ひが致しました。形になつてゐないものにこそ、実は真実が隠されているといふこと、ともすると、形や客観的に見へるものに頼りがちになる日常だが、自分の内にある感動を積み重ねることが大切なんだといふことを改めて感じました。班員の皆様に大変恵まれ、良い三泊四日の合宿になつたこと感謝いたします。ありがとうございました。

楽しかったこと嬉しかったことこそ本当の自分の歴史と師は語られし

## 皆さん心のまっすぐな方ばかりでした

（損害保険料率算出機構・福岡調査事務所　鎹　信弘）

二十八班の班付きをさせて頂きありがたうございました。班員の方々は、皆さん心のまっすぐな方ばかりでした。教師の中村先生は授業で松陰先生や乃木大将なども教へてをられ、教員の世界では今まで孤軍奮闘してをられたやうです。息子さんも一緒に参加したといふことであり、是非今後ともお会ひできることができればと思ひます。

合宿では、十分な働きができませんが、今後とも少しでもお役に立てるやうに努めてまいりたいと思ひます。

この夏の合宿も無事に終はりしを逝きにし友もみそなはすらむ

ありし日は合宿のことにひたすらに努めたまひし君にてありき

足らはざる吾れにあれども一日一日努めゆかなむ友偲びつつ

## 第三十一班―社会人―

### 「神聖な地」を体感できた

（㈱はせがわ　関本順子）

この合宿に参加したのは二回目となります。昨年の信貴山では、聖徳太子縁（ゆかり）の地で太子の御心にふれ大変感動し帰路についたことを憶えています。今回、さらなる感動を求めてこの伊勢に初めて参りました。多くの山にかこまれ、各地にある有名寺社・仏閣とは異なり、堂々と厳かにある御社を見て、神々のいます〝神聖な地〟を体感いたしました。

そのような中で先生方の熱意あふれる講義に負けじと私達も班別研修では意見交換に力が入りました。又、吉田松陰の講義では、私が今まで知らなかった「吉田松陰」の一面を知ることが出来ました。その人の生きてきた背景や家族のことなどを多角的に知ることにより、偉人の心にふれることができ、その深い家族への愛と日本の国への想いに心うたれました。

最後に、この合宿の全体感想を聞いて感じたことは、「親と子」「教師と学生」「大人と若者」など、今日本で取り上げられることの多い関係です。この関係がこの合宿ではうまく調和しています。このような合宿にこれからも多くの人が参加し、意見を交すことを大切にしていければと思います。

伊勢の地で上がる日の丸見つめつつ御祖の心伝はりてきぬ
帰り路の支度の手をとめ窓見れば霧立ち上りて神々を感ず
伊勢の地で聞く母の声なつかしく帰り支度の手も早まりぬ

### 短歌創作の素晴らしさを体験できた

（エアロビクスインストラクター　清水智子）

私は今回初めて合宿に参加しました。父の勧め・というかほぼ強制的に。しかし、参加するのが嫌だとは思いませんでした。普段は怖くて聞けない父の考えている事、想っている事が分かるかもしれないと思ったからです。

合宿中の講義は、私にとってとても難しいものばかりでした。しかし、先生方の熱心に強く語られるお姿から、「いつ、誰が、何をした」としか教わらなかった偉人の、日本を想う深く強い心を感じることができました。

一番楽しかったのは、やはり班別短歌相互批評です。短歌創作の時は、自分の感動を一首に納めるのがとても難しく、苦戦していましたが、班で、班員それぞれの一首に込めた感動をどのようにすれば、より伝えられるのかを、年齢も経験もバラバラな人達と語り合ううちに、「この短い一首でこんなにも人の気持ちを伝えられるんだ。」と思うようになっていました。伝統文化は守っていかなければと思ってはいまし

たが、自分で体験し、その本当の素晴らしさを感じられた今、「素晴らしいこの伝統文化を引き継いでいきたい。」と心から思うようになりました。ありがとうございました。

合宿最終日、早朝に伊勢神宮を参りて

さくすずの五十鈴の流れたうたうと雨の恵に神意(みこころ)ぞ知る

## 大和撫子をめざして

(㈱寺子屋モデル研修生　梶川視代)

いくつまでやまとなでしこと呼べるのでしょうか。この合宿に参加させて頂いて、これからは誰はばかることなく、私は大和撫子をめざそうと思いました。これまでのように、どこか遠慮しながら国歌を歌うのではなく、ご皇室の何たるかを知って尊敬申し上げ、日々の営みは短歌を作ることを通して、心素直に生きる日本の女性、やまとなでしこ。このようにできたなら、あらまほしい老後の姿が生き生きと目に浮かびます。

元はといえば、ジェネレーションギャップに悩み、あまりの世の変化の速さに焦慮し、それらにどのように対処すればよいのか悩む自分がありました。もう悩まなくてよいのです。

この合宿で以上のような気持ちの区切りができたのも、数か月前から偉人伝を語る勉強をさせて頂いているからだと思います。一年を通して三人の偉人伝が語れるようになるという講座に参加しています。今では一人の偉人を語れるようになりました。「吉田松陰」です。この勉強を通して、「しきしまの心」「やまと心」が受容できるよう私の心が耕されたと思います。合宿に参加してよかったです。ありがとうございました。

真直ぐに日の本おもふ心映えこの学び舎でしかと学びき

こしかたの胸のつかへのおりしより迷ふことなきやまとなでしこ

この国に生まれし幸をかみしめて笑(え)みふりまきて生きる歓び

## 「松阪の一夜」に感動

(アトラスコプコ㈱　森田暁子)

初の合宿参加で、とても充実した四日間を過ごすことができました。小柳先生の「よみがへる古事記」の松阪の一夜を読んで、一生に一度の真淵と宣長の出会いを知り、師弟関係の強さを感じました。出会いの後は便りを何度も交したということですが、三十年を越える年月を医者の業を平行しながら「古事記伝」の編さんに携わったその偉業に感嘆するばかりです。私も国の為に何ができるかを日々考えながら生活を送っていますが、縣居大人の言葉のように、「まづ低きところをよく固めおいて、高いところに登り」たく思います。その為には、まず私が日本の歴史をよく知り、周りの人に説明できるようになりたいものです。

「君が代」を歌う機会もめっきり減りましたが、合宿では毎日斉唱して、清々しい一日一日を過ごすことができました。

慰霊祭の厳かな儀式にも神々が降りてこられた気配も感じました。

この合宿では皆さまのおかげで日常体験することのできないような貴重な機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

厳かな儀式のうちに御祖(みおや)らの御霊(みたま)下りて守りたまふらむ
さくすずの五十鈴の宮へ物詣(ものまう)で長なきどりの音(こゑ)に目覚める

## 自分の内面が大きく成長した

(社)福岡県中小企業経営者協会　謝　佩津(はいしん)

今回の合宿は会社の新人職員研修の一環として参加しました。合宿の参加が決められたとき、大きな恐怖感を感じました。この国に来て、優しくして下さる方はたくさんいますが、受け入れてもらえない場面がさらに多くあります。さらに、日本国民にとって、「伊勢」とはとても神聖で神々が居る場所です。きっと合宿中いろいろ言われたりするだろうと不安がさらに広がりました。でも結局、参加することに、決めました。そのきっかけは会社の会長の「逃げるばかりではいけない」という一言でした。この一言で、合宿でボロボロになっても挑戦し、そして、何か周りの誤解を解けるのではないかとの思いで参加させて頂きました。

実際、合宿の中で意見が合わなかったり、誤解により少々ぶつかりはあったものの、班の皆さんが優しく受け入れて下さりとても嬉しかったです。3日だけでここまで班の人（皆、違う年代、違う出身、違う職業）と打ち解けて仲良くなることは不思議でした。

また、歴史人物（聖徳太子など）のことについてバカな質問をしても（聖徳太子がなんで天皇じゃないの？…など）、面倒くさがらなく教えて頂きました。今回の合宿は、内容が難しくてほとんど分からないし、アレルギーで体もきついですが、自分の内面が大きく成長したと確信しています。

御守りを買ひ求める時
御守りを千円で買ひ相方の浮かぶ笑顔を思ひほほゑむ

## いろいろなことを知り、心に広がりを持ちたい

(株)ビッグ・エー　西島めぐみ

今回の合宿には、会社の新人社員研修として参加をしました。まったく知らない人達と4日間、一緒にすごすということはとても不安でした。けれど、班別研修などで、班員の方々の意見を聞き、話し合う中で、共感できることもあれば、自分とは違う考えも聞くことができました。そして、もっと色々なことを知り、心に広がりを持たなければいけないなと感じることができました。

班員の方々との触れ合いを通じて、自分の知らなかった話を聞くことができたり、また、新たなことに挑戦することによって、いろいろな発見があり、自分を成長させていくこと

ができるんだと思いました。

また、会社の研修ということで、なかなか会うことのできない同期や先輩とも話をすることができ、頑張っている姿を見て、自分も新たな決意で仕事をしていこうと、元気をもらうこともできました。

今回の合宿で学んだことを、日常生活や仕事に生かしていきたいと思います。

雨上がり静かな朝にバラの花まるい雫に心安らぐ

## 日本人として連なる安らぎを感じた

（鎌倉の教育を良くする会・代表　山内裕子）

たくさんのよいご縁に恵まれましたこと心より感謝申し上げます。十代に父母に連れてきてもらった遠い朧げな記憶がありますが、今回の合宿を経て、伊勢をなつかしい地として心に刻みました。

この合宿で学生さんや若い人たちが素直に学ばれるお姿に心打たれました。第五十三回の国民文化研究会の合宿教室に参加し、よき学びの場としての伝統を、若人たちがバトンを受け継いでいこうとされる意欲を嬉しく頼もしく思いました。

同じ班の先輩、友人と交わり、講義について学びを深め、和歌を詠み、互いに批評しあうことは貴重な体験でした。慰霊祭に参加して、神事を通して、和歌の朗誦が心身に響きわたりました。祖先の霊をおもい、私も日本人として連なる安らぎを感じました。

合宿最終日の早朝、参拝した伊勢神宮の静けさ、雨上がりの水量豊かな五十鈴川の滔々とした流れは力強く、明日への元気の源となります。深い森に神々が住まわれ、私たち子孫の祈りをきき護ってくださるという安らぎをいただきました。神宮の木立にきらめく木洩れ日は忘れがたい夏の思い出です。

森深く木洩れ日さして晴れ晴れと伊勢の御神に友と参りけり

## 生き生きとした心を持ち続けたい

（神奈川県立新磯高校教諭　原川猛雄）

今回の合宿では、あらためて自分が叱咤激励された思ひです。鎹さんの「内なる国家を見つめよう」で始まった導入講義のテーマは、その後のご講義にも一貫してゐることを感じました。日本人として心のふるさとをしっかり見つめ、感じることの大切さをあらためて思ひました。

また、小柳左門さんのご講義のなかで、生きた心をもって古事記をよみがへらせようといふお言葉にははっとさせられました。思はず自分の心が生き生きしてゐないのではないかと感じたのです。古典の言葉のすばらしい調べを味はふことによって、古代人の魂に触れることができる。そして、現在に生きる私達の心にも生き生きとした生命力が吹き込まれるのだと思ひます。

黒上先生のご本の班別輪読では、班員が心を一つにして、

声を出して読みすすむうちに、難しい文章も少しずつ内容がわかってくるやうな体験を味はふことができたことはとても嬉しいことでありました。黒上先生の「真実の信」といふお言葉は強く心に残るものでした。どのやうな環境にあっても、「真実の信」を失なはずに友らと共に励ましあって行かねばと思ひました。

班員の皆さんは真摯に合宿生活に取り組み、仲良く研修に励んで下さいました。本当に感謝してゐます。解散してもお互ひに頑張っていきたいと思ひます。

黒上先生の御本の班別輪読にて

むつかしきふみにはあれどみ友らと声を合はせて読みてゆくなり

くりかへし読みすすむうちに自づから高き調べの伝はりてきぬ

ありがたき功徳にやあらむ読むうちに大人のみ声の聞こゆるが如し

み友らとひとつみふみをもろともに読みゆく幸せありがたきかな

## 大切なものを確認できた

（元・富山県立富山工業高等学校教諭　岸本　弘）

何度合宿に参加しても、閉会式前のひと時は独特な思ひがします。僕と同様に班員の皆さんも、しみじみと合宿を振り返りながら、感想文を書いてをられるのでせう。

わづか三日余りの時間で、お互ひに大切なものを確認できた思ひがします。途中で帰られた金尾さんも含めて、十名の者が、一人一人心を傾け合って来た努力の結果なのでせう。会ふ前は名前も顔も知らなかった者同士が、何か旧知の間柄のやうに思はれてなりません。

それぞれ、平生の生活の場に戻られても、この合宿で学んだものを大切に生かしてゆけたらと思ひます。お互ひに健康を大切にして頑張りませう。

一本の缶ビールに酔ひ語らひし最後の夜の忘れられずも

感想文書きゆく友らの背中見つつ別るる時の近づくを思ふ

目交にとどめおくべしひと度の縁のありて会ひし君らを

# 第三十二班―女子社会人―

## 初めて日本を知ったような気がした

（㈲立花不動産　吉村美希子）

今回参加させていただこうと思いましたのは、研修の中に伊勢神宮参拝があることでありました。と言いますのも、一昨年に女系天皇容認問題が出てきて強い危機感を覚えました時に、日本とは何なのか、と知らないことの多さに気がつき、やはり原点に立ち戻らなければならないと思ったのです。

そんな思いでこの合宿に参加させていただいたわけですが、あまりにも得ることが多く、また想像を超えたものでありました。

まず伊勢神宮のあらゆるところから神代の日本が感じられ、

深い感動を覚えました。御神楽では巫女の流れるような動作、音の一つ一つが自然と溶け込んでいるような、言葉に表せないほどの思いで私は初めて日本を知ったような気がしました。先生方もあふれる思いをお話しいただいて、班での研修でも尊敬しあい学びあう、貴重な経験をさせていただきました。この感覚的なものをもっと伸ばし、本来の日本の心を養っていけたらと思っております。

伊勢の地に師弟入り交じりて学び合ひ高めあふ姿尊かりけり

## 心が温かくなっていく思い

（主婦　清水希久子）

昨年、初めて合宿に参加させて頂き、感銘を受けまして、「あの感動をもう一度、家族全員参加」を心に決めまして、今回家族四人（一人欠席）で参りました。

諸先生方の御講話を拝聴すればするほど、日本人でありながら、日本の歴史、文化を知らないことを痛感致しますが、御製を通して天皇の御心にふれ、古典から先人の方々の日本を思う熱き心、美しい日本の言葉を学んでいくうちに、日本人であることの喜び、日本民族の血の流れている自分をうれしく思い、なぜかしら心が温かくなっていく思いが致しました。

良き班友に恵まれ、とても有意義に楽しくすごせましたこと、最後になりましたけれども、この合宿のための御準備を頂きました方々に心より感謝申し上げます。

朝まだき連なりてゆく白さぎの社（やしろ）の杜へと消え入りにけり

## 日本の素晴らしさに「はっ」とさせられた

（㈱はせがわ　菅井若菜）

私はお仏壇のはせがわに勤務いたしておりますので、ほとけさまに関することには触れる機会が多いのですが、神さまのことは無知で触れる機会も少ないので、今回の合宿を参加の皆様とはまた少し違った意味で心待ちにしておりました。

そして、先生方の、特に小柳左門先生の、日本人の魂のふるさとと言われる「古事記」のお話を拝聴し、伊勢神宮で荘厳な御神楽を拝見し、参拝し、夜に岸本弘先生の聖徳太子のお話を拝聴した時、神も仏も全てを受け入れ、融合し、豊かな文化を築いてきた日本の素晴らしさに「はっ」とさせられました。

知識が乏しく、講義を理解することも短歌創作も悪戦苦闘しましたが、班の皆さんのお蔭で合宿を終えることができました。生かされて生きていることを忘れず、人のお役に立ってゆけるよう、合宿で学んだことを思い返し、励んで参ります。

伊勢での合宿を終へて
めぐりあひて共に学びし友どちと日々励まむと誓ひて別る

## ありのまま素直に表現する事が大切

（㈱ビッグ・エー　結城茉莉）

会社の研修の一環として参加させて頂きました。講義の内容や初めて会う人と四日間過ごすということで、不安いっぱいでした。しかし、班別研修があることで、講義の内容をより深く理解する事ができ、徐々に興味もわいてきました。

今回の研修で印象に残った事は小柳左門先生の「よみがへる古事記」です。文章というものは飾ったりする事で美しく見せる一面もありますが、古事記は飾らない事実をありのままに書くという事で、当時の状況がとても分かりやすく伝わってきました。特に倭建命が東を治めに行く時に思った不安な気持ちまで正直に書かれており、又、死の直前に思った事が生々しく伝わってきました。これは短歌を作る上でも通じることであると思います。自分だけの世界を書くのではなく、状況そのままを書く、うまく書こうとしないという事を学びました。確かに、上手な短歌は状況そのままにすーっと体に伝わってきます。私はこの研修でありのまま素直に表現する事が大切で自分自身もそうあるべきであると学びました。

松陰の夢に見えたる敏三郎は声に出して程子を読みけり

## 生まれ変わった私

（㈱寺子屋モデル・研修生　桶村清子）

この三泊四日の合宿に参加して、凝縮した、実に充実した九十六時間を過ごした。あっという間に終わったのだが、私の中では一日の使い方、日常の過ごし方の大変良いお手本となった。

初めて創作した短歌は自分の語彙のなさに気付き、素直に感じたことを伝えることをしていない自分を発見することとなった。

また、何十年ぶりかの集団生活では、自律していない自分も班員の優しさや気遣いにより、本当の意味でのコミュニケーションを気付かされた。

講義を聴き、班別研修の中から生まれ変わった私の内なる国家を大切にしながら、今後、自分のできること、日の本の心を持つ日本人の友人をたくさんつくり、今まで先人が受け継いでこられた伝統と文化を継ぎ、守り、伝えていきたいと思う。

岩越班長が私の感想発表を詠まれた短歌を贈られて

うたに込めたまひし真心ありがたくはにかみながら笑みのこぼれね

## 班員の「短歌通信」を作りたい

（元・小田原市立矢作小学校長　岩越豊雄）

聖徳太子のご本の輪読は難しい箇所であったが、皆で一文づつ読み解き、全文を何とか読み終へたことで、皆、達成感を感じたやうだ。

短歌創作は初めての人も多く、歌を直すのに時間がかかったが、折角短歌作りを体験したのだから、その創作技量を高め、心を磨くためにも班員の「短歌通信」というか二カ月に一度歌を作り、まとめて班付の小柳左門さんに添削して頂こうと提案したら皆賛同してくれた。無理せず、取り敢えず一年間続けたい思ふ。

全体発表に立ちなんとする班員の心の緊張いかばかりなる
堂々と壇上に立ちて感想を述ぶる班員の姿りりしき
干上がれる五十鈴の川の川水のあふるるごとき心地すといふ

## みずみずしい心を蘇らせて頂きたい

（国立病院機構都城病院・院長　小柳左門）

今回の合宿教室では、「よみがへる古事記」と題して、講義をさせて頂きました。本居宣長といふ方のすごさと、古事記のすばらしさを何とか伝へたいと思ってをりましたが、何とも力足らはぬ自分に、今春お亡くなりになった夜久正雄先生に導かれる思ひでどうにか講義を終へることができました。若い人々に今後とも古事記、そして万葉集を読みついでいただき、先人の力強い言葉を通して、みずみずしい心を蘇らせて頂きたいと切に願ってをります。

学生参加の数が少ないなど、問題は誠に厳しいものがありますが、ものに感じる心はきっと持ってゐることを信じ、まず自らの学びを怠りなく続けて参りたいと思ってをります。

皆様の励ましに心から感謝申し上げます。

合宿最終日の朝

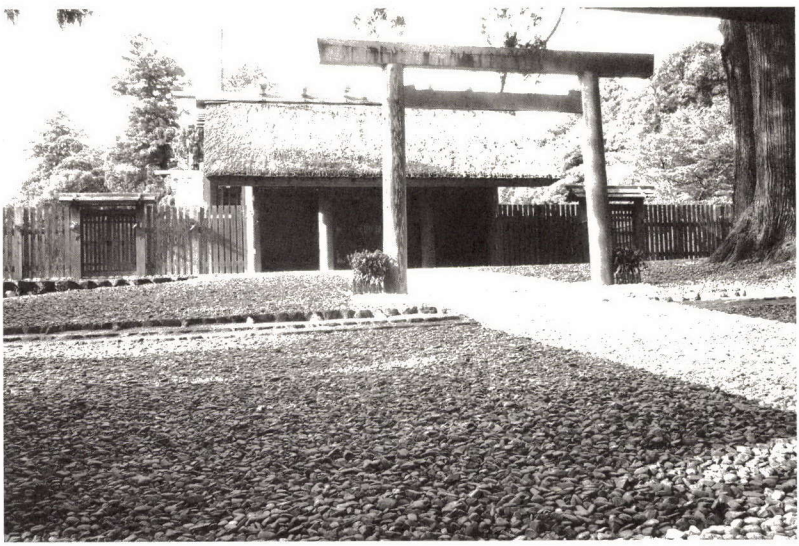
きのふよりふりたる雨にかはきたる五十鈴の川は満ちて流るる
かはきたる心いやさるる思ひして水豊かなる川を眺むる
流れくる五十鈴の川の川上は霧にかくれて神ますごとし
雨雲のかかる神路（かみぢ）の山すその緑は深く神代し思ほゆ
雨にぬるる参り路（ぢ）ゆけば朝の空に長鳴鳥の声ひびくなり
幼きも長（たけ）きもまぢり子供らはうち笑まひつつ参り路をゆく
ゆきちがふ知らぬ人ともあいさつを交はすがうれし朝の参り路

朝の集ひ、全体発表の友の言葉

つきあひをさらに深めてまことなる友とならむと君語りゆく
（谷口君）
力足らぬ我をはげまし支へくれし友ありがたしと語りましけり
（鷲頭君）
先人の思ひうけつぎ伝へむと力にみちて語りたまへり
歌よみてまことのこころ言の葉をもとめゆかむと述べたまひたる
うちふるふ声はげましておのが思ひ語る乙女に胸はうるむも
語りゆく若き友らのすなほなる言葉に力与へられつつ

# 合宿中に創作された「短歌詠草」

## ―しきしまのみち―



# 短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、国民文化研究会会員の内海勝彦氏（株式会社ＩＨＩエアロスペース）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに国民文化研究会会員の小柳志乃夫氏（興銀リース株式会社）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ、各自の短歌の表現をより正確に添削し合ふことを通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

# 短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

## 第一班

中央大学　理学部　四年　中村仁宣

神楽奉納にて
殿内に澄み渡る気の身にしみて己が心の清められゆく

立命館大学聴講生　坂　直純

古ゆ神につかへし人ありて伊勢の正宮守られにけり

京都大学　工学部　二年　馬場　惇

まっすぐに太しく立てる杉の木は千年を超ゆる月日経にけむ

國學院大學　文学部　一年　相澤　守

小柳左門先生の講義「よみがへる古事記」にふれて
師の君の講義を聴きて古のみ祖のこころ学びていきたし

TAC公務員講座聴講生　宮地順造

伊勢神宮に参拝せし折に
たわいなき話をしつつ友どちと参道歩むは楽しかりけり

## 第二班

杏林大学　総合政策学部　四年　松井宏太

合宿導入講義にて松尾敬宇大尉の勇姿を聞きて
司令塔ゆ身をのり出して敵艦に向ひし姿を我は忘れじ

亜細亜大学　法学部　三年　青砥諒典

木々の間に開けし景色美しく心に焼きつく五十鈴の川は

㈱アルバック　北浜　道

短歌導入講義にて
先生は声ほがらかに歌詠みの心がまへを話し給ひぬ
『短歌のすすめ』この本のみを繰り返し繰り返し読み学び給ひきと

早稲田大学　政治経済学　一年　小川公一

青きこけむしたる屋根の御饌殿の美しく建つ伊勢の森中

首都大学東京　法学部　四年　和田浩幸

神々も聞き給ふらむ宮人の清らな笛の音響き渡るを

東京大学　教養学部　一年　平石　享

各地より集ひし我等古事記を読みゆくひとときき心つながる

## 第三班

九州工業大学　情報工学部　四年　鷲頭祥平

小柳左門先生の御講義を聞きしをりに
倭建をかたる御姿熱あふれメモも忘れてひたすらに聞く

明星大学　日本文化学部　四年　宮川拓也

神楽を聞きて
見る人は代々に変れど古へゆ聞き残れるは笛の音なりけり

日本大学　商学部　一年　宝辺壌治

そびえ立つまはりの木々に蝉鳴けどふきわたる風は秋の心地す

藤沢翔陵高等学校　二年　須藤慶一郎

神宮の自然に我も包まれて心やすらぐふるさとのやうに

東京大学　教養学部　二年　室園隆大

先人の尊び給ひし言の葉のまことに触れつつ

我ら生きなむ
國學院大學文学部　史学科　三年　坂本匡史

小柳左門先生の「よみがへる古事記」を聞きて
「まほろば」と故郷偲びし古の英雄の歌に心ふるへる
「松坂の一夜」を読みて
日頃より飾らぬ言葉をつむぎゆきやがて離れむ漢意から

## 第四班

玉川大学　経営学部　三年　豊田隼史

伊勢神宮を参拝し折
古ゆ育ちし木々のそびえ立つ姿に歴史の長さ偲ばるる

杏林大学　総合政策学部　三年　上宮朋広

伊勢神宮の御神楽殿にて
厳かな御神楽殿の雰囲気におのづと心も引きしまりゆく

日本工学院専門学校作業療法　一年　池松敏生

短歌の提出期限迫り来て
提出期限迫り来れども巨大なる木々の景色は歌にならざり

福岡教育大学大学院　一年　平田無為

本居宣長『古事記傳』より倭建命
いさましき倭建命の悲しみも恨みも隠さずあらはされしか

九州工業大学　三年　谷口耕平

大御神の祭られにける御宮にただありがたしとをろがみまつる
古事の記よりつづく日本の歴史に生きる身のありがたき
由緒ある伊勢に集ひて友どちとお宮に詣づる事ありがたし

## 第五班

東京大学　教養学部　一年　豊増隆宏

内宮に詣でし折に
大御神鎮まりませる伊勢の地に襟をたださるる心地するなり

杏林大学　総合政策学部　三年　工藤博志

伊勢神宮内宮を参拝して
古ゆ受け継がれこし営みの変らぬ姿に思ひ馳せたり

大阪工業大学　二年　戸田憲太郎

神楽の舞に奏でられたる笛の音は心地良くして眠気誘ひぬ

西日本電信電話㈱　武田有朋

小柳左門先生の御講義の後、古事記を友らと輪読して
宣長の力を尽して解き給ふみ文を友らと読み味はひぬ
古の人らの心を偲ばむと声を合せて読み進みゆく

倭建命の望郷の歌を輪読せし折りに
友どちろ声を揃へて読み上ぐる命のみ歌の心に沁みぬ

## 第十一班

桐蔭横浜大学　法科大学院　岡部恵理

皇后陛下の御歌をききて
いつの日も我を思ひて手を合す母の姿の自づと浮かびぐ
返しても返しきれない恩なればせめて長生きしてほしきかな

東京大学　理科一類　一年　岩瀬桂子

宇治橋を渡りて仰ぐ高き空にかすかに浮ぶ虹見つけたり

日本青年協議会　三荻　祥

違ふ地ゆあまた友らの集ひ来て共に学べる事のうれしき

宣長も井上毅も日の本のふるごとぶみにたづね入りたる
おごそかに響きわたれる笛や筆の音に合せて巫子ら舞ひけり

明星大学　日本文化学部　四年　赤堀文香

古人を思ひ今を感じて
宇治橋に潮風渡り思ひ出づ芭蕉の詠みし松風の句を

九州産業大学　芸術学部　四年　諫山仁美

幾百年年を重ねし大木の皮のぶあつさ手に感じけり
足しびれ立てぬ友どちかかえ上げ皆と一緒に笑ひ合ふなり

青山学院大学　国際政治経済学部　二年　河口はいりん

時重ねよろひのごとき木はだ見せ空をつきさす杉の大木
九州女子大学　人間科学部　二年　西山志織

あざやかな緋の袴と白妙の衣召す巫子に目をひかれけり

㈱寺子屋モデル　黒岩礼子

小柳左門先生の御講義「よみがへる古事記」を聴きし折
目を細めやさしきお顔で話さるゝ師のみ姿に心ひかれり

㈱ビッグ・エー　犬飼健次

古事記にあるいにしへ人のまごころをよみがへらせむと熱く宣ふ
目頭を熱くし声もうちふるひ語らるゝ姿胸にせまりく
我もまた師のごと熱き思ひもち偉人を語る講師になりたし

## 第二十一班

元・日立プラント建設　日高廣人

小柳左門先生の「よみがへる古事記」をお聴きして
学びたる古事記の言の葉に古へ人の意を想ふ
古人の捨て置かれたる心根を甦へらせたり宣長大人は

広島県警本部　花岡伸明

お伊勢参りの家族連れを見て
をさな子の手を取り歩む家族連れを眺めて思ふ我が子我が妻

㈱ビッグ・エー　八木澤達也

歴史講義「よみがへる古事記」を聴きて
我が国の實の歴史を伝ふるは意と事の言なりけり

㈱ビッグ・エー　犬飼健次

神楽
いにしへの雅楽の調べを聞きつつも畳のにほひに我が家を思ふ

日揮㈱　江口研治

班別研修にて
初参加の言葉少なき友がらへやさしく語る兄は頼もし

神楽
神代より伝へ伝へし御神楽を皆と奉るはありがたきかな

## 第二十二班

協同組合ＡＡＡ　内田厳彦

神おはすごときお伊勢の参り路を友と語りつつ畏み歩く
笙の音に兄と聞き惚る雅なる音色を初に聞く心地して
我が妹と孫娘抱きて二年前お伊勢の宮に無事を祈りぬ

㈱はせがわ　飯山信一

伊勢神宮参詣にて
正宮を仰げば二千年時超えて神明造りの今に伝はる

池田　潔

熱き地の東京を出て伊勢の駅に降りたちみれば涼しさ覚ゆ

北陸電力エネルギー科学館　戸田　一郎

第53回全国青年合宿教室に参加して

国おもふ数多の同志に励まされよき師よき書知りてうれしも

世代越え国の行末を語り合ふ心は熱く言葉静かに

五十鈴川の干上がれるを見て

亡き父と共に渡りし五十鈴川水面（みなも）に躍る鯉を賞づるも

フリーライター　日下部　晃志

五十鈴川分け隔てなく人情もかくありたしと思はるるかな

㈱ビッグ・エー　小故島　靖仁

乱れどもふるさとなりし国がための仕事に励まん思ひ新たにす

## 第二十三班

山口県立熊毛南高校　宝辺　矢太郎

伊藤哲夫先生の御講義をききて

西東学びの道をきはめしもつゆゆるがざりし君徳の思

古事（ふること）の書（ふみ）にあまたの「しらす」とふ言葉のいのちよみがへりくる

我が里の敬親公にたふときのり成りたるしらせつかはされ賜ふ（大日本帝国憲法）

たふれたる松蔭隆盛ありてこそとおほみめぐみたれたまふとぞ

ただならぬ師の君のあつきみ思ひにわがむねはなりなみだたりくも

㈱ビッグ・エー　角間崎　貴志

神宮の森をふき抜くる風うけていにしへにかへる心地するなり

近藤良捷

今までに数多の社を巡りしも初に詣づる伊勢神々し

博多高等学校　村山　篤生

幾百年月日重ねて育ちたる大き神木仰ぎ見るかな

㈱バントレーディング　森重忠正

倭姫宮に立寄る

伊勢の地を大宮地と決め給ふ倭姫まつる御社に参る

夏の日をさへぎる木々に囲まれて御社静かにたたずみてあり

立花商事有限会社　吉村　明紘

我の背をおしてくれたる父の顔思ひおこせば心ひきしまる

車窓より空をのぞめばはるかなる伊勢をおもひて胸の高鳴る

いまだ見ぬ友をおもひて我の胸の高鳴るおもひをおさへがたしも

宇治橋を渡りて宮に入りたれば心あらはれ清々しきかな

厳かなるみかぐらの音聴き入れば身のひきしまる思ひするなり

帰り道妹におくらんと土産をば選ぶひとときなんと楽しき

## 第二十四班

防衛省航空幕僚監部　神谷　正一

五十鈴川の水に遊びし子供らの泳ぎたるさまの涼しげに見ゆ

御神楽奉納

御饌などを手渡しつつ供へたる巫女のしぐさの舞ふがに見ゆる

村式㈱　住吉　優

伊藤先生ご講義終了後の質疑応答にて

先生の覚悟を決めよとのお言葉に我が魂は奮ひ立ちけり

㈱ビッグ・エー　越田　肇

歳の差も立場もこえて集ひたる友らと共に学

びゆきたし

さわらび画廊　田中壽幸

生涯にひとたびは詣づと思ひこし伊勢の宮居に我はをるなり

いにしへゆ神のおはせし神宮の参道歩めばこころ清しも

㈳福岡中小企業経営者協会　田中隆一

朱き袴に御祓持ちて巫女らのをりなす舞に心おどりぬ

## 第二十五班

ＩＭＳグループ本部　最知浩一

内海先輩の短歌導入講義の折

いたつきの身とはなれども友や師にあまたのみ歌よまれし先輩は（山根清先輩）

ありし日の先輩のみ姿思ひ出されあふるる涙とどめかねつも

み病にたふれし先輩ののこされしみ歌をよねば涙あふるる

日商保険コンサルティング㈱　川本　剛

山道を心静かに歩みゆけば古の代の偲ばれてこし

ＮＰＯ法人教育オンブズマン　稲田健二

しづかなる舞のなかにもはげしさを秘めたる動きの内宮神楽

村式㈱　中川　尚

昭和天皇の終戦の御製を拝して

いかならん時にありても民想ふ陛下の御心ありがたきかな

民想ふ御心まさに子を想ふ親の心と同じなりけり

民想ふ陛下の御歌を拝すれば我が父母を想ひ出しけり

㈱ビッグ・エー　小島一嘉

川床をみせて水なき五十鈴川ひたにいのるは雨ふらんことを

福岡県中小企業経営者協会　永嶌幸平

力無き蝉の鳴き声聞きをれば過ぎゆく夏に淋しさ思ほゆ

あずさ監査法人　牧美喜男

雅びなる神楽の舞は先人の守り伝へ来し積み重ねなり

## 第二十六班

福岡県立直方高校教諭　小野吉宣

朝のつどひにて（八月二十二日）

吹き渡る風の涼しく肌をなで神の恵みと感じ居るなり

鳴く鳥のさへずり聞ゆる神前の朝のしらべはさはやかなりけり

日の丸の掲（あが）りそむれば自づから国歌君が代歌ひだしけり

「さざれ石の」と唄ひてをれば極まりて涙あふれ来日の丸かすむ

大御神みそなはすらむ大空に日の丸高く掲げられたり

喜びは湧きてやまずも皇國（すめくに）に生れし縁の有難きかな

㈶都市防犯研究センター　小田村初男

伊勢合宿に参加して

日の本のかしこき伊勢に集ひ来て内なる国を求め語らふ

心込め話さるる師の御言葉に国の成り立ち身にしみいりぬ

合宿の朝宇治橋の袂より遥拝して

心静め拝（をろが）みをれば風そよぎ鳥のさへずり清々しかり

産経新聞社　塩塚　保

千古の社夜明けを告ぐる鶏鳴に天をあほげば霊気満ちたり

㈱はせがわ　土岐英敏

いにしへゆ絶ゆることなくにぎはひし伊勢の道われも踏みしむ

参道を踏みしめ行けばいにしへのやまとの人と心かよひぬ

石塚工務店　石塚琢磨

おごそかな霊気を感じ歩み入る伊勢の神域美しきかな

同士らと歩む喜びかみしめてひたすら神に感謝ささげぬ

遷宮の近きを感ずるお伊勢さま慶びを胸に祈りまつりぬ

㈱ビッグ・エー　林　和久

我おもふここ伊勢の地で同輩と学びし事を伝へてゆかむ

日本植生㈱　宇祢洋志

抱く子の重くなる事うれしくて腕の疲れも覚えざりけり

伊勢神宮の子安神社にて

手を合せ妻の安産願ひこめ子安神社に祈りまつりぬ

産れくるまだ見ぬ赤子楽しみに二人の姉は待ちわびてをり

## 第二十七班

大森和弘

眼りかね臥所より見る窓ごしに日の出づる前の伊勢の山陰

㈱日本植生グループ本社　大月博史

伊勢に来て覚え初めにし昂ぶりを忘れじと思ふ帰りし後も

㈱ビッグ・エー　福田　透

自立説く師の言の葉に日の本は斯くも貴き国なりと知る

日本植生㈱　田邨研二

参道を歩みてゆけば玉砂利の音心地よくきこえくるなり

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

参道に並び立ちたる大杉の高き枝より光もれくる

## 第二十八班

アサヒ飲料㈱　澤部和道

そよ風にひらりと揺るる御帳の奥に感ぜし神に拝(をろが)む

神奈川県職員　中村正和

国のため命を捨てし大丈夫の心しのべば涙流るる

㈱はせがわ　斉藤　徳雄

古(いにしへ)も多くの人ら願ひもち伊勢詣でけむかくにぎはしく

赤福の変らぬ味に思はるる伊勢に詣でし人の祈りも

㈳福岡県中小企業経営者協会　光武健司

神宮参拝にて

語り合ひ友と歩きし参宮路妻子(さんぐうぢつまこ)といつか共にたどらむ

天高く真直(ます)ぐにのびる杉の木のますぐなるごとく我も生きたし

㈱ビック・エー　増田光宏

早朝の伊勢の宇治橋渡りつつその静けさに心やすらぐ

神宮司庁　世古口修一

稲刈りに我らが思ふはただ一つ機械止まらず無事終ること

## 三十一班

神奈川県立新磯高校　原川猛雄

内海兄の短歌創作導入講義を聴きて

忙しきつとめのあひまに励みつつ今日にそなへしいたつきを思ふ

力こめ語りゆかるる言の葉にまごころこもり心に響きぬ

亡き友のみ歌を聞けばありし日の友のみ姿浮びきにけり

㈳福岡県中小企業経営者協会　謝佩津

御神楽の時迫り来て急げども砂利にはばまれ
心焦りぬ
朱の衣をまとひあらはるるもののふの荒ぶる
舞に心をののく

鎌倉の教育を良くする会　山内裕子

しきしまのやまと心をたづねきて伊勢の社に
御祖を偲ぶ
清らなる伊勢の社を友と歩み古き木立に幸を
祈れり

㈱はせがわ　関本順子

御正宮に向ひて歩む伊勢の道大木の凛々しさ
に負けじと思ふ

エアロビクス・インストラクター　清水智子

伊勢に参詣

天高く真直ぐにのびる大木に国の御柱かくあ
れと思ふ

㈱寺子屋モデル　梶川視代

歌いまだ提出できづ言葉やみ蕎麦すする音高
くきこゆる

アトラスコプコ㈱　森田暁子

伊勢に来て姿見えねどおはします天照大神の
御心尊し

㈱ビッグ・エー　西島めぐみ

見上ぐれば目を見張りけり大木の天へと高く
のびる姿に

国民文化研究会　岸本　弘

合宿始る

壇上に立ちませる友らこの日まであたため来
し思ひかたりたまへり
語ります友の言葉の一つ一つを耳傾けて聞き
まつりゆく
さ夜更けて神宮の森の高空にかかれる月の照
りわたるかも
明日は我も語りゆくべき日となりて高空の月
を仰ぎ見るかな

## 三十二班

元・小田原市立矢作小学校校長　岩越豊雄

古の手振りのままに大神のみ前にかしこむみ
この尊し
み神楽に合わせて舞ひ行く乙女らののどかな
手振りに神代を思ふ
よもぎ色の長き袴引きのどやかに舞ひたるみ
こは神なぐさむるごと
燃ゆるごと朱き衣の厳しき蘭領陵王の舞ひの
勇し

㈱はせがわ　菅井若菜

日の本の国の斎庭に詣で来て古事記の御代に
思ひ馳せけり

㈲立花不動産　吉村美希子

粛々と行はれゆく御神楽にただただ見入り涙
こぼるる
歌に触れはたと気付ぬ君が代はみそひともじ
のしらべなりしと

桶村清子

伊勢合宿にて

集ひましし人の気遣ひありがたく和の貴さを
改めて知る

㈱ビッグ・エー　結城茉莉

宇治橋を渡りて行けば伊勢の森古代の日本の
忍ばるるかな

清水希久子

目に見えぬ神の御姿仰がんとお伊勢参りに心
ははずむ

金尾裕子

宮の木を見て心に悟る命の重さ一生の心一生
の財産

## 国民文化研究会

国民文化研究会理事長　上村和男

小柳左門君の講義をきゝて

心こめふるごとふみを語りゆく君の言葉の心

にしみぬ
鈴の屋の一夜うつつに浮び来る君の語りのすばらしきかな

（二回目の作品）

師の君と仰ぐ人々年老いて集ひの庭に来まさず淋し
この年も苦しみ悩みいだきつゝ師の君偲び集ひ来にける

元・日商岩井（株）澤部壽孫

たまゆらのいのちの限り鳴く蟬の声のかなしくひびく参り路
なつかしき師と先輩今年はいまさずてさびしかりけりこれの合宿
内宮に垂るる帳をゆらしつつ今さはやかに神風の吹く
さくすずの五十鈴の川の一杯の水を欲りつつ逝きましし大人（桑原暁一先生）
君語る古事記の面白く時よ止まれと思ひつつ聴く（小柳左門兄）
会はずして二十年経し我が友と会へばたちまち心通ひぬ（内田厳彦兄）

（二回目の作品）

慰霊祭

一年の友らのいたつき実りたる斎場いつかし部屋内なれど
師の君と友に加はりこの春に逝きましし師も天降りますらむ

全体意見発表

若きらの思ひもこもれる言の葉に力湧きくるつとめざらめや

㈱伊勢利代表取締役　今林賢郁

参り路に蟬のしき鳴きやはらかくみやしろてらす夕日影かな
宇治橋の鳥居のかなたうすく濃き夏の緑のしるくもあるかな
雨をよぶけはひもかすかにただよひて神路の山に雲はむれたり

（二回目の作品）

最終日（八月二十四日）早朝

小雨ふる参り路ゆけば朝まだき晴を告げんと鶏の鳴くなり
宇治橋も雨に濡れたり五十鈴川雨をあつめて水の音高し
明けやらぬ空に雨雲むらがりて宮居の木立もほのに暗しも

元・㈱講談社　磯貝保博

伊藤哲夫先生のご講義を聞きて

日本の真の「自立」の意味を問ふ気魄激しく胸にせまりく
数たのむ心は捨てよ少なくも信もて行けば道ありとのたまふ

（二回目の作品）

我が力足らずなりとも友皆とすすみてゆかむ来む年目指し

国民文化研究会事務局長　稲津利比古

岸本弘兄と早朝参拝す

宇治橋ゆ遠くを望めば数多なる鷺の集ひて水に遊べり
拓殖大學日本文化研究所客員教授　山内健生

内海勝彦兄の短歌創作導入講義

短歌との出会ひを語る言の葉に力こもりて胸にひびきく
須田兄の代役なれども落ちつきて務め果たすが頼もしく見ゆ
落ちつきて太きみ声にさはやかに短歌の心得君は説きゆく

山根清兄のみ歌を再び読みて

手をとりて泣きしと詠みし亡き友の胸内思へば言の葉出で来ず
妻と子に果てなきみ懐ひ抱きつつ逝きしと思へば吾が胸痛し

㈱寺子屋モデル代表取締役社長　山口秀範

内宮にて神楽奉納

ひんやりと気は澄み渡る神楽殿諸人居並び神祭るとき

舞人の右手にかざせる常盤木の枝にぞ揺るる
白き一つ輪
楽の音と舞ひとをつなぐ笏拍子響き清けく
胸底に満つ
果つるともなき舞見つつ悠久の時し流るる心
地こそすれ

（二回目の作品）

黒岩礼子の「会員発表」

発表を控へて座せる君見れば我がことよりも
胸騒ぐかな
「うりはみ」の由来の長歌詠み行けば次第に
心落ち着くらしも
子供らの日頃のさまを告ぐるとき面輪明るく
輝き初めぬ
己がことの語らるるをばはにかみを浮かべつ
つ聴く君の生徒は（元「うりはみ」生の中村
遥哉君のこと）
合宿と「うりはみ」をつなぐ一筋の道明らか
に君照らしたり
思ふこと言ひ晴らしたらむ胸張りて今壇上を
下り行く君よ

東急建設㈱常務取締役　奥富修一

次々と聞ゆる神楽のみしらべの我が胸内に沁
み入る心地す
いにしへゆ伝はり来たるみかぐらを御殿に上
り聞くもかしこき
しづもれる御殿内はほのぐらく神楽の音の神
さび聞ゆ

（二回目の作品）

内宮にまぢかき宿に友どちと集ひて迎ふる朝
のさやけき
同信の友の言葉に新たなる力めぐまれ集ひを
終ふも
国学院大学大学院博士課程後期二年　大岡　弘

渡邊和洋先生の新嘗祭の御講話をお聴きして

祭主さま大宮司さまを先頭に御贄調舎ゆ登
りゆく御列
大御食のアワビ収めしからひつを取り囲み進
む御列の偲ばる

（二回目の作品）

けいひつの声おごそかに鳴りわたり御霊の来
臨仰ぐこの夜

新明電材㈱　飯島　隆史

岸野兄と車にて神宮に参りて
祭の為道具清めて翁一人松坂の里に吾らを待
ちます
ひぐらしの鳴く森の中神さびし多賀の宮前友
とぬかづく

㈱ＩＨＩエアロスペース　内海勝彦

須田兄、仕事の為急遽「短歌導入講義」
を担当す
くさぐさに準備されこし友どちの無念やいか
にと思んばかりぬ
突然の代役なるも心尽くし務め果さむと思ひ
定めぬ
三十年前初めて歌を作りたる合宿のこと蘇り
きぬ
学び来し「短歌のすすめ」の若きらに読み継
がるるを願ひ語りぬ
亡き友のみ歌も読みぬまごころをうたひあげ
たる歌のしらべを

（二回目の作品）

全体感想自由発表

来年も参加したいと語りたる友らの言葉をあ
りがたく聞く
合宿に集へる人らそれぞれに国のいのちを感
じ給ふか
若きらの道を求むる思ひ受け学びの集ひ営み
ゆきたし

興銀リース㈱　小柳志乃夫

二日目早朝

あかつきの寝覚めの床に合宿に来ざりし人ら
を思ひやるかな
わが父も師の君もまたわが友も常見る人らに

さはり出で来つ
思はざることの起りて合宿に来ざりし若き友
も思はゆ
なつかしき師や我が友よ合宿に深きみ心寄せ
たまふらむ
なつかしき師や我が友の御姿をこほしく思ふ
朝の小床に

元・日産自動車　古川　修

「短歌導入講義」で山根清君の歌をよみて
三年はや過ぎ去りゆきて亡き友の声しのばる
る伊勢の集ひに
くさぐさのこと語りたしと苦しげにかたりし
日のこと甦りきぬ
聖王の御言葉誦して生きたしとよみしみ歌ぞ
悲しかりける

熊本市役所　折田豊生

伊藤哲夫先生の御講義をお聴きして
国思ふあつきみ心あふれけり師のみ言葉の一
つ一つに
「知らす」てふ明治の御代の先達のみことば
あつく説きたまひけり
我らまたはかなき命かたむけてみおやが跡を
辿りつとめむ
神楽奉納
国の柱ゆるがずあれと祈りつつ友らと神楽を
納め奉りき
ほのかなる明りの中に笙の音と笛つづみ和し
厳かなりき
しづかなる舞を息つめ見守りけりをとめの舞
ををのこの舞を
国の命永遠にこそあれかく浄くかくも気高き
御神楽の舞

（二回目の作品）
全体感想自由発表

若きらが次々立てる壇上のみ面さやけく目に
映るかな
真顔なし思ひを述ぶる若きらにこのひと年の
いたづき報はる
思ふことたくまず語る若きらは我が子の如く
いとほしきかも

元・キューピー㈱　山本伸治

緑深き宮居の森に抱かれし集ひの庭に三年振
り訪ふ

（二回目の作品）
全体感想自由発表によせて

素直なる気持そのまゝ晴やかに語りかけくる
姿たのもし
思ひをば表はさんとてとつとつと語る言の葉
心に沁み入る

㈱バントレーディング　森重忠正

倭姫宮に立寄る

夏の日をさへぎる木々に囲まれて御社静かに
たたずみてあり

産経新聞社　大内保治

伊藤哲夫先生のご講義の皇后陛下の御歌
をききて詠めり

国柱太くしあれと祈りつつ皇后宮のうれひは
深し

（二回目の作品）
八月十五日仲間達と靖［原文は正字］國
神社へ昇殿参拝し、北京へは行けども靖
［原文は正字］國神社へは来ない人に詠
めり

ぎらぎらとてりつけりたる石畳蟬［原文は旁
が「憚」と同じ旁］はなくなく焔立つかな

国立病院機構都城病院院長　小柳左門

伊勢神宮神楽殿にて

いにしへのまつりの手ぶりそのままに供物捧
げて巫女進みゆく
花串をうづにさしたる巫女たちは身を正し舞
ふ神のみ前に
おのづから上代のまつりしのばるる笙ひち
りきの楽の音聞けば
白衣の袖をうち振る舞ひ見れば白鳥の飛ぶさ
まと思ほゆ

神風の伊勢の巫女らの舞ふ見れば神代の昔思ほゆるかも

九州大学大学院教授　清水 昭比古

皇大神宮

ほの暗き杜の奥なる御社は光溢れて御柱太し

（二回目の作品）

静もれると見し大杉の技の間を流るる霧は乱れて疾し

㈱ケイエヌラボアナリシス　天本和馬

合宿地に夜かけつけて

作業場に入ればすでに人皆は準備進めりいつものごとくに

なつかしき顔も見ゆれどあいさつの短き言の葉交すのみにて

（二回目の作品）

全体感想自由発表を聞きて

ありがとうございましたと壇上で語る言葉のさはやかにして

気の向かぬ気持ちを持ちて来たりしも又参加したしといふ人のありけり

鳥栖市役所　西山八郎

遷宮の敷地に立ちて新しきみ社の姿思ひ浮

損害保険料率算出機構　鎹　信弘

早朝の伊勢神宮参拝

朝まだき友と語りて歩みゆく伊勢の参り路楽しかりけり

朝明けの空に群れつつ黒影の五十鈴川辺に舞ひゆくを見つ

干上りし五十鈴の川に残りたる池に数多の白鷺群るる

暁の長鳴き鳥とふ鶏の集い遊べる姿愛らし

神楽殿にて

榊葉を右手にもちてたをやかに四人の乙女の倭舞舞ふ

白き輪のかかりし榊を手に持ちてますらをのこの舞ひ清々し（人長舞）

面つけし赤き衣の男子舞は戦ふさまを表すらむか

若築建設㈱　池松伸典

内海勝彦兄の御講義を聴きて

亡き友の残せしみ歌をたどりゆく友の話に心こもれり

三年前病ひをおして訪れし友の姿の思ひださるる

（二回目の作品）

合宿教室閉会式前に

今は早閉会式の近づきてたちまち過ぎし四日を思ふも

各々に別れゆくともこの出会ひ深まりゆくが願はれにけり

福岡県立香住丘高等学校　酒村聰一郎

一日目　深夜合宿地に到着す

小夜更けて合宿に馳せ参ずれば友ら準備に励みをりたり

疲れたる様見せつつも笑顔にて吾を迎へたまふ先輩有難し

合宿の営み陰にて支へたる友らの務め尊かりけり

平山直樹税理士事務所　北村公一

内海勝彦先輩の短歌創作導入講義

亡き先輩のさま語らるる師の声に先輩を偲びます思ひあふれぬ

木の間より青空見えて亡き大人の見守りまさむと思はるるかな

（二回目の作品）

全体感想自由発表

勇気出し手を挙げ壇に登りゆく友らに心に声援送りぬ

とつとつと語る言葉に人柄の表れ出でて微笑ましかりき

（牧美喜男さんの発表）

知識には知りをりたれど感動のなければ歌は詠めぬとのたまふ

ハローワーク大牟田　古川広治

短歌創作導入講義にて山根先輩の歌を聴

きて

平成の学問如何と歌ひ給ひし先輩の御心よみがへりくる

うたひつぎ語りつがれて先輩の御心みなの心に生きゆく

（二回目の作品）

あれこれと頼みごとしても嫌な顔せず引受けくるる友らありがたし

㈱寺子屋モデル　三林浩行

井上毅（伊藤先生の講義を聴きて）

血吐くまで真剣な努力重ねられ国の憲法つくりたまひぬ

（二回目の作品）

倭建命

残りたる最期の力に絶唱せし「嬢子」の御歌の悲しく響く

調神社　岸野克巳

十五年を経ましし宮の御屋根に草むす見れば心痛みぬ

日本青年協議会　外村聖典

伊勢神宮神楽奉納

青垣の伊勢の山辺にあそびたる白鳥見れば皇子の偲ばゆ

ラックホールディングス㈱　高橋俊太郎

録音担当として持ち場を訪れし時に憶えある機器の配置にしみじみと三年前が思ひださるる

（二回目の作品）

慰霊祭の直会で藤村酒造のお酒を頂きて兄醸し熱き想ひのこもりたるお神酒を呑みぬ命の水よ

伊佐ホームズ㈱　小柳雄平

見あぐれば宇治橋の上をさやかなる真白き鷺の一羽とびゆく

（二回目の作品）

岸本先生に会ひて

師の君に会ふべき伊勢のつどひへと胸おどらせつつに向ひゆきにき

講堂の扉を開けばまささきにも師のみ姿の目にうつるかも

近づきゆく我に気付きて師は「おお」とのたまひみ手をさしだし給ふ

ただただに嬉しきろかも師の君と握手を交はすそのひとときの

下関国際高等学校　秋田崇文

高橋兄

陰ながら身を尽したる御姿の貴きものと思はるるかな

## アルバイト

篠栗町立篠栗中学校一年　中村遥哉

赤福はモチモチとしておいしくて我は二回も食べてしまった

埼玉県北本市立宮内中学校二年　最知雄飛

そびえたつ樹木のすごさに目をとられ歴史の重み感じる伊勢神宮

裾野市立須山中学校二年　幸池美佐子

たくさんの人でにぎはふレトロでなつかしいおかげ横丁の建物

## 合宿地に寄せられた歌

（運営委員長宛）　青森　長内俊平

さくすずの五十鈴の集ひへと旅急ぐ友らのみ姿目にみるごとし

大み祖のみ胸に抱かれその末と生れし幸語り合ふらむ友ら羨しき

参じえざる我もみちのくゆ朝夕をみ庭にこころ馳せまつりなむ

（岸本弘さん宛）

忙しき発し出のきはの時さきて書かれしみ文いまつきにけり（八月廿日午後一時）

今年またゆかれぬ合宿に思ひ馳せありつるこ

ろをみ便りつきつ
太子のみ言葉声を合せて誦しまつるつどひのさまの目にうつりくる
ひたすらにただひたすらにみ書（黒上正一郎先生の御本）誦みつらなり来つる友しらを思ふ
頂ける資料読み終へまたさらに集ひの庭に心馳せらる
大み守り君の言葉にうつされて若きらの胸ゆするを信ず

下関　宝辺正久

わが仲間ら老いて行きえぬ合宿をいま負ひてゆく友らを思ふ
若き日の友の雄叫びしのびつつ道歩みこし戦後の年月
さくすずの五十鈴の宮の森かげを朝ゆく友らしのびまつらむ

福岡　小柳陽太郎

友らみなつどひますらむはろかなる伊勢路のみ空しのびやまずも
はろかなる神代のいのちさながらにいまうつつなり伊勢の神垣
さはやかに音たててゆくかむがきの五十鈴の川のただになつかし
み国いまだならぬ日を若きらのつとめは重し立たざらめやも

（岸本弘さん宛）　東京　小田村四郎

岸本弘兄より講義レジュメを拝受して
精魂を傾け給ひしこのレジュメ再び三度読みまつりけり
難しき太子の御言葉味はひつつ若き友らに説く君を偲ぶ
我もまた講義の席に列なりたしと思へど行かれず口惜しきかも
友どちは君が講義を味はひて心通はせ語り合ふらむ
緑濃き伊勢の宮居を仰ぎつつ共に語らふ友ら羨しも
神代より一すぢの道受けつぎてみくにのいのち守らざらめや

# あとがき

初冬の候、皆様にはその後如何お過ごしでせうか。伊勢市「神宮会館」で共に学び、語り合つた「合宿教室」から早や三ヶ月が過ぎました。このたびやうやくこの「感想文集」を皆様のお手許にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもつた文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時でした。

それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

㈠「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

㈡「短歌」について

合宿では二回にわたつて短歌を作りましたが、第一回目のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、感想文の執筆の折につくつていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や終業後の時間をさいて御協力いただきました澤部壽孫、稲津利比古、藤井　貢、小柳志乃夫、池松伸典、内海勝彦、北浜　道の各氏に心から御礼申し上げます。

カメラ・レポートの写真は最知浩一、三林浩行、高橋俊太郎さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご協力によつて出来上つた「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願いたします。

読み進むにつれて、「合宿教室」の三泊四日間の様々な感動が鮮明に甦つてくる事と思ひます。三ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長、班付の方々、班友に一筆便りを差し上げていただきたく、併せてお願ひ申し上げます。

（磯貝保博　記）

〔資料〕
第五十三回〝合宿教室（伊勢）〟感想文集
非売品
平成二十年十二月十五日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集長　磯貝保博
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇